

第2章 被害と応急対応

第1節 被害の実態

磐梯山の噴火による被害範囲は、現在の行政区で考えると^{やま}耶麻郡猪苗代町(346.59km²)、耶麻郡北塩原村(234.899km²)、耶麻郡磐梯町(59.52km²)の3町村にまたがる。

福島県庁文書によると、岩なだれや爆風、そして土石流などの噴火現象により465名が死亡、28名が負傷したとされている。後に述べるように、死亡者数に比して負傷者数が少ないのは、高速の噴火現象により逃げる間がなく、死亡する率が高かったこと、更には、入院した負傷者のみをカウントしたにすぎなかったということが考えられる。

図2-1は1889(明治22)年に農商務省地質局より発行された1/50,000地図(明治22年4月1日の

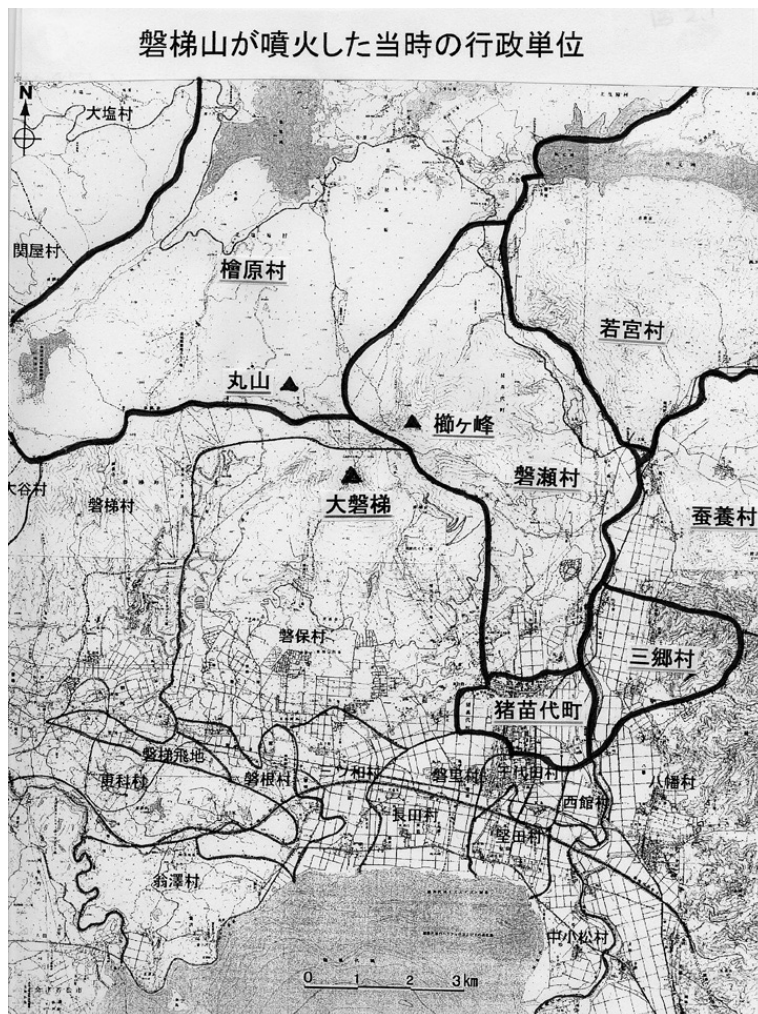


図2-1

町村合併以前の行政界が示されている)及び福島県町村合併資料を基に推定した当時の行政界を、現在の国土地理院発行1/25,000地形図上に示したものである。農商務省が明治22年に発行した地図は、測量により作成されたものではなく、現在の地形図と重ね合わせることはできないため、当時の行政界となっていた地形的特徴(尾根や川など)や集落の位置関係を基に、現在の地形図上に行政界を推定して示したものである。

明治以降、日本における最大規模の火山災害が磐梯山の噴火であった。図2-2にあるように、その被害は磐梯山の主に北側と東側に及んだ。

磐梯山の噴火は大きく3つの現象で構成されている。

1つは、水蒸気爆発による^{がんせつ}岩屑なだれ(岩なだれ)で、磐梯山の中の小磐梯が山体崩壊し、北麓の榎原村(北

塩原村)を埋めた(図2-2の磐梯山の北側の部分)。

2つは、東麓を流れる長瀬川を山体崩壊後の土石流が下り、磐瀬村(猪苗代町)の川上地区や長坂地区を埋めた(図2-2の磐梯山の東側の南北に細長い部分)。

3つは、磐梯山の山頂と沼ノ平から東南の方向へ、爆風(ブラスト)という非常に強い風(図2-2の2番目に色の濃い部分)と岩屑なだれ(図2-2の一番色の濃い部分)が流れ下り、磐瀬村(猪苗代町)の見祢・渋谷・白木城を襲った。これらの現象が及んだ範囲は東西約10km、南北約16kmの地域であった。この被害の実態について、地図上に集落を単位として表記する。

なお、当時と行政区の区分けが変わっているため、本文中は、当時の町村名を先に、()内に現在の町村名を付けて表記する。

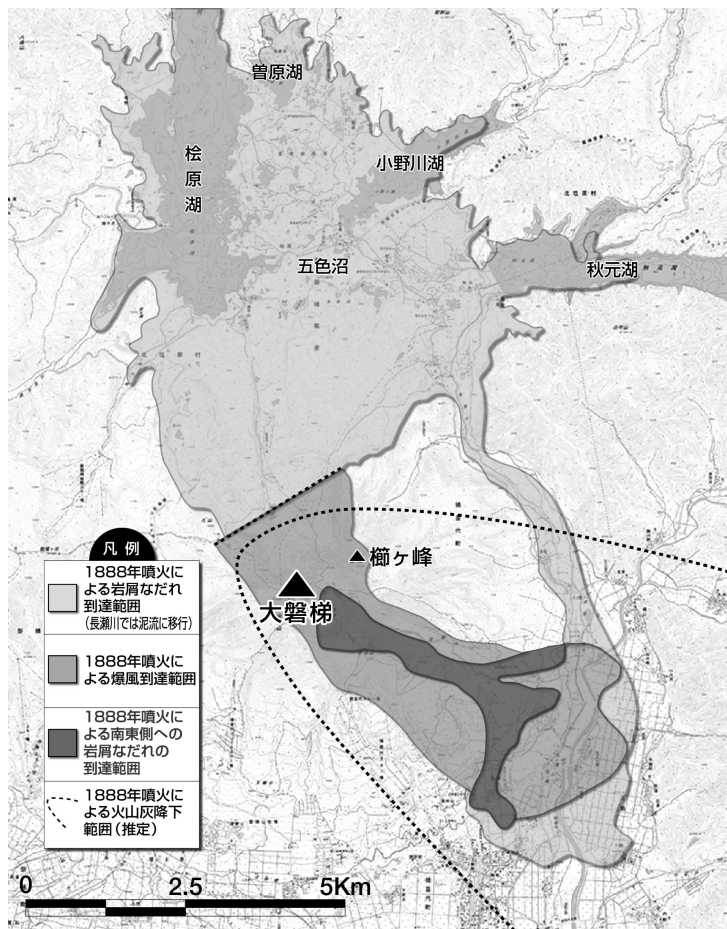


図2-2(磐梯山火山防災ハンドブック(2001年磐梯山火山防災連絡会議)に掲載されている図から、1938年の土石流と1954年の斜面崩壊部分を削除し作成)

図2-3、2-5、2-7、2-9、2-11、2-13、2-15、2-17、2-19、2-21、磐梯山火山防災ハンドブック(2001年磐梯山火山防災連絡会議)に掲載された図に加筆修正

(1) 死亡被害

表 2-1 磐梯山噴火による地域別の死亡者数

現在の行政区	町村名	字名	総戸数	人口	死亡者	死亡率	死亡原因
北塩原村	小計					234	
	檜原村	雄子沢	20	120	105	87.5	岩屑なだれ
	檜原村	細野	7	42	42	100	岩屑なだれ
	檜原村	秋元原	12	79	67	84.8	岩屑なだれ
	檜原村	小野川	12	67	4	6	岩屑なだれ
	檜原村	檜原	51	297	10	3.4	岩屑なだれ
猪苗代町	中計					178	
	磐瀬村	長坂	31	168	86	51.1	土石流
	磐瀬村	洗谷	30	235	3	1.3	爆風+土石流
	磐瀬村	見祢	49	304	14	4.6	爆風+土石流
	磐瀬村	川上	3	12	12	100	土石流
	磐瀬小計		113	719	115	16	
	若宮村	名家	25	158	15	9.5	土石流
	若宮小計		25	158	15	9.5	
	蚕養村	白木城	21	110	3	2.7	爆風+土石流
	蚕養村	樋ノ口	13	93	2	2.2	不明
	蚕養村	小田	73	466	4	0.8	不明
	蚕養小計		107	669	9	1.3	
	三郷村	伯父ヶ倉	41	254	2	0.8	爆風+土石流
	三郷小計		41	254	2	0.8	
猪苗代町	町内全体				37		なだれで1人
磐梯町	磐梯村				3		岩屑なだれ
3町村の合計					415		
耶麻郡塩川町					11	(湯治客4)	なだれで9人、他
耶麻郡山都町	山都村				1		岩屑なだれ
喜多方市		2で1人			18	(湯治客7)	なだれで12人、他
会津若松市					4	(湯治客4)	岩屑なだれ
河沼郡河東町					5	(湯治客3)	なだれで3人、他
河沼郡会津坂下町					1		不明
田村郡船引町					1	(湯治客1)	岩屑なだれ
双葉郡浪江町					3	(湯治客3)	岩屑なだれ
3町村以外福島					44		
新潟県三条市					4	(湯治客4)	岩屑なだれ
山形県米沢市					2		不明
県外の合計					6		
合計					465		
(温泉湯治客)					28		
合計に含まれる							

福島県庁文書「事変取扱二関スル書類」及び「磐梯山噴火百周年記念誌」により作成

死亡者は415人で、人口に占める割合は約14%となる。465名のうち、遺体で発見されたのは87名で、80%以上の人が未だにこの磐梯山の地下に眠っている。

磐梯山の死亡者数については報告書内コラム「さまざまな説がある磐梯山噴火の死亡者数について」を参照のこと。

a. 檜原村(北塩原村)

被害者の半分近くを占めるのが、檜原村(北塩原村)である。小磐梯の北側に位置し、短時間に岩屑なだれ(岩なだれ)による土砂が到達した地域なので、その被害を避けることはできず、多くの犠牲者を出すことになった。この村は南北に長く、北側の集落の被害は小さかった。

(a) 雄子沢地区

戸数：20 人口：120名 被害戸数：20 死亡者：105名 (死亡率：88%)

次のページの図2-3にあるように、小磐梯山の北の約4kmに位置し、噴火から一番近い場所であったため、集落全体が山体崩壊の土砂で数分後には埋没した。噴火口がちょうど北北西に開いているため直撃を受ける形となった。現在の雄子沢地区とは異なり、裏磐梯高原駅の展望台の西方に位置していた。集落は南北に長く、図2-4の斜線部分が家屋を示している(図2-4は福島県地籍図を基に作成)。

磐梯山が噴火することを事前に知らなかった住民は、逃げる間もなくその高速な噴火現象に飲み込まれてしまった。当時の調査によると、岩屑なだれ(岩なだれ)の速度はおよそ時速80kmと推定されている。一番近い集落には数分で到達している。遠い所でも十数分で到達している。自動車もない時代であるから、避難自体が不可能であった。

表2-1のデータから、北側の岩なだれでは、275名が亡くなった。これは全死亡者の59%を占める。東側の土石流では、114名が亡くなった。これは24%を占める。東南の爆風(ブラスト)及び岩屑流(岩なだれ)では、22名が亡くなった。これは5%を占める。残りの54名はどこで亡くなったかは不明である。当時の被害地の人口がおよそ2900人で、温泉の湯治客や外来者を除くと

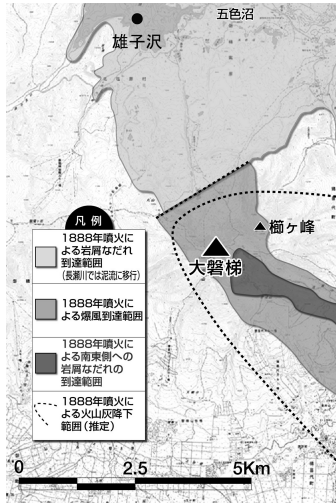
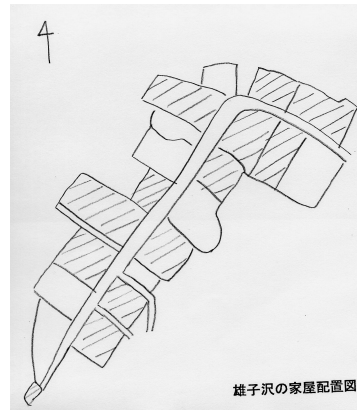


図 2-3



雄子沢の家屋配置図

図 2-4

生存人が存在するのは、当日、集落から離れた場所にいたことによる。

その中の 1 人、小椋倉太郎は大倉川へ魚釣りに行っていたため、災害から免れた。1888 (明治 21) 年 10 月 23 日の福島県からの聞き取り調査では次のように答えている。

「噴火後、小野川で泊まり、その後大塩へ泊まり、6 日後に雄子沢へ行った。ここが雄子沢であろうと思う所へ行って見たが、何だかわからず空しく帰った。土石で 10 丈(約 30m)ほど家が埋まったものと思うが、どこが雄子沢かもわからず、その後は行っていない」(『福島県庁文書』から、現代語訳)。

自分の家族は全て亡くなり、その埋没した家の場所すら見つけられなかった小椋の気持ちはいかばかりであったろうか。

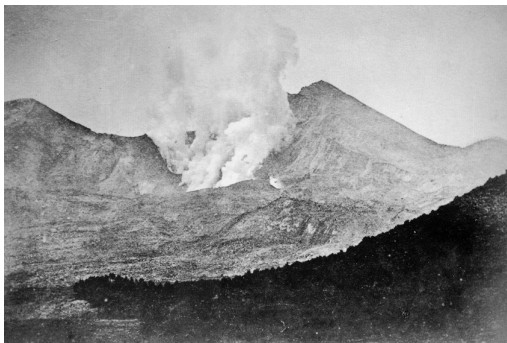


写真 2-1

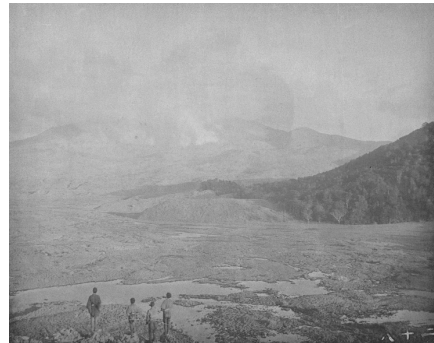


写真 2-2 (福島県立図書館所蔵)

写真 2-1 の撮影者は不詳だが、雄子沢からかなり近くに磐梯山の噴煙を見ている。

写真 2-2 は仙台市在住の写真師、遠藤陸郎が撮影したもので、雄子沢からの磐梯山だが、人物の側の水溜りは、これから檜原湖が形成される最初の風景である。

(b) 細野地区

戸数：7 人口：42名 被害戸数：7 死亡者：42名 (死亡率：100%)

図2-5にあるように、現在の細野の東北、狐鷹森^{こたかもり}とのほぼ中間に位置し、小磐梯山から北約8kmの距離にある。こちらも雄子沢地区と条件は同じで、集落全体が山体崩壊の土砂で数分後に埋没し、住民全員が死亡した。集落は東西に長く、図2-6の斜線部分が家屋を示している(図2-6は福島県地籍図を基に作成)。

細野の北側2kmほどの所で農作業中に罹災した檜原村の齊藤豊吉は、1888(明治21)年7月の福島県の聞き取り調査では次のように答えている。

「畑仕事をしていたら、地震があり、その3度目のときにいっしょに仕事をしていた二瓶茂吉(噴火で死亡)が磐梯山が抜けるから逃げろと大きな声を出した。私は弁当を投げ捨て子ども1人を連れて逃げ出したが、そのときには黒煙の中に家のような土石が鉄砲のように、ゴウゴウという音を出して勢いよく迫ってくるのがわかった。私は漸く逃げ延びたが、茂吉や子どもたちは逃げられず死んでしまった」(『福島県庁文書』から、現代語訳)。

実はこのとき、齊藤豊吉の妻ミツも死亡しているが、聞き取り調査では触れていない。

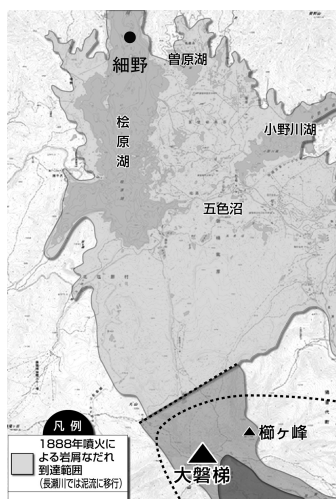
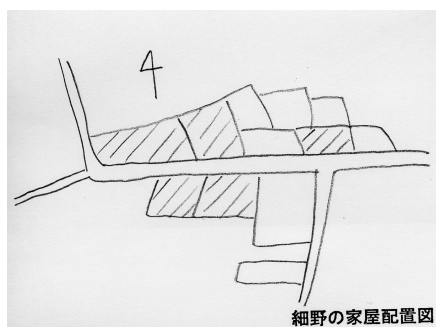


図2-5



細野の家屋配置図

図2-6

(c) 秋元原地区

戸数：12 人口：79名 被害戸数：12 死亡者：67名 (死亡率：85%)

次のページの図2-7にあるように、小磐梯山の北東の約6kmに位置する。現在の集落から東へ約2kmの所にあった。細野地区よりは噴火口に近いが、山体崩壊の流下域の東側の突端であったため、死亡率は少し下がる。集落は東西に長く、図2-8の斜線部分が家屋を示している(図2-8は福島県地籍図を基に作成)。

次のページの写真2-3は国立科学博物館で発見されたものだが、秋元原から磐梯山を見ている写真で、手前にある水溜りが後に秋元湖となる。写真2-4は遠藤陸郎の撮影で、同じような場所から撮影されている。山体崩壊の堆積物が一面を覆ってしまったことがよくわかる。

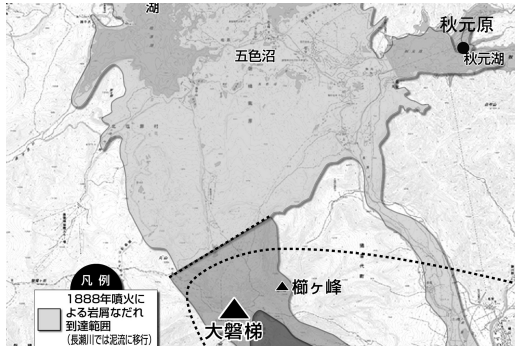


図 2-7

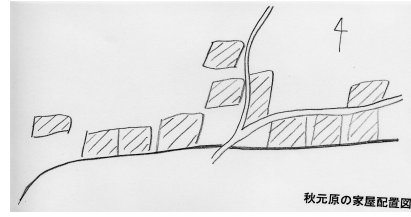


図 2-8



写真 2-3 (国立科学博物館所蔵)



写真 2-4 (福島県立図書館所蔵)

(d) 小野川地区

戸数：12 人口：67名 被害戸数：0 死亡者：4名 (死亡率：6%)

次ページの図 2-9 にあるように、小磐梯山の東北東の約 8 km に位置し、山体崩壊の土砂に集落は埋まっていない。現在の集落より北側にあった。集落は東西に長く、図 2-10 の斜線部分が家屋を示している (図 2-10 は福島県地籍図を基に作成)。

ここで死者が出たのは、農作業などで磐梯山寄りの地域にいたためである。

小野川の小椋鹿三郎と小椋米三は、1888 (明治 21) 年 7 月の福島県の聞き取り調査では次のように答えている。

「朝飯をすますと地震が始まり、3 度目の強い地震がするや否や、ドンと音がして、真っ黒な煙が上がった。私は出火と思ったが、村の者が騒ぎ出し、磐梯山が抜けて化け物が出てくると言い出し、逃げてもだめだから、鉄砲や鎌を持ち出して闇の中に声を上げて、その化け物を殺そうと思った。そのように村中が浮き足立っていたら、黒煙が東の方へ抜けて、その憂いも止まった」(『福島県庁文書』から、現代語訳)。

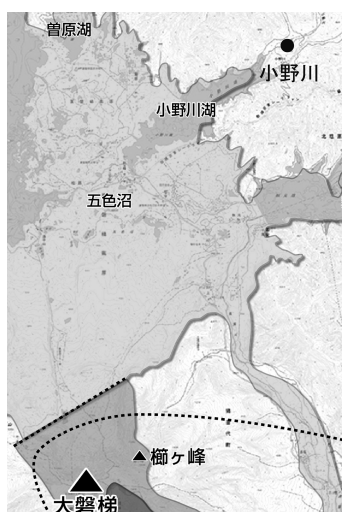


図 2-9



図 2-10

(e) 檜原本村

戸数：51 人口：297名 被害戸数：0 死亡者：10名 (死亡率：3%)

小磐梯山の北側の約 12 km に位置し、山体崩壊の土砂は小磐梯山の約 9 km ほどの所で止まったため、直接の被害はなかった。ただ二次災害として、川がせき止められ、水位が高まったために、高台へ避難せざるを得なかった。そのため、現在の檜原本村は当時の村から西側 2 km の高台へ移動した。

10 名の死亡者は細野地区の猫小屋という所で農作業中に災害に遭遇した。その家族に同行した子供も含まれる。(b)の細野地区での聞き取り調査を参照のこと。

(f) 大塩村 (北塩原村)

小磐梯山の北西の約 9 km に位置するが、雄国山などの高い障害物があり、直接被害を受けることはなかった。

秋元原で土地調査をしていた男性 2 名と細野で農作業をしていた 2 名、温泉で湯治をしていた 1 名の合計 5 名が亡くなっている。

(g) 北山村 (北塩原村)

小磐梯山の北西の約 13 km に位置するが、大塩村と同様に、雄国山などの高い障害物があり、直接被害を受けることはなかったが、1 人が亡くなっている。

b. ^{いわせ}磐瀬村(猪苗代町)

(a) ^{みね}見祢地区

戸数：49 人口：304名 被害戸数：18 死亡者：14名 (死亡率：5%)

下の図2-11にあるように、沼ノ平から南東約4kmに位置し、集落の東側をブラスト(爆風)という非常に強い風と岩屑流(岩なだれ)が流れ下り、大きな被害を与えた。集落は東西に長く、図2-12の斜線部分が家屋を示している(図2-12は福島県地籍図を基に作成)。

見祢の五十嵐弥七は、1888(明治21)年10月16日の福島県の聞き取り調査では次のように答えている。

「家から2丁(約200m)ほど北の田んぼで仕事をしていたが、3つ目の地震があまりに強いので、家に帰ろうと走って途中まで行くと、ドドーンと大きな音がして、磐梯山の上より真っ黒な煙が出て、ドンドンガラガラと音がして、一面真っ暗になった。ドンと音がするとまもなく、^{びわさわ}琵琶沢を黒煙と同時に火が混じり押し出した。泥のかたまりがポツポツしたものがバラバラと降った」(『福島県庁文書』から、現代語訳)。

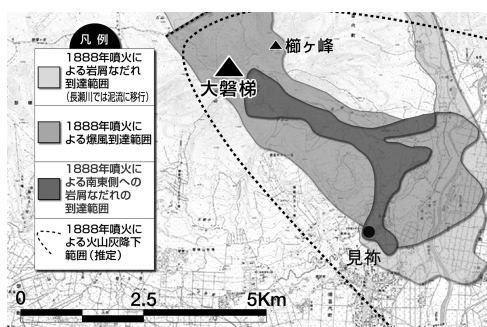


図 2-11

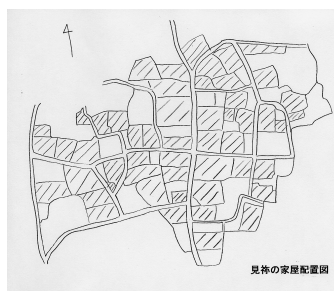


図 2-12

次の2枚の写真は、当時喜多方で写真館を営んでいた岩田善平が、噴火の2日後に南側から磐梯山を撮影したものである。写真2-5の中央左側が被害を免れた見祢の西側の集落で、東側は完全に土砂に埋没した。写真2-6はその東側に岩屑流(岩なだれ)とともに流れ着いた巨大な岩で、これを「見祢の大石」という。現在、国の天然記念物に指定されている。このような大きな岩は1つではなく、見祢地区の北側に現在でも多数存在する。このことから考えても、火山のエネルギーは非常に大きいことがわかる。しかし、「見祢の大石」はその自重により現在では半分ほど埋まって民家の庭石となっている。



写真 2-5 (竹内写真館所蔵)

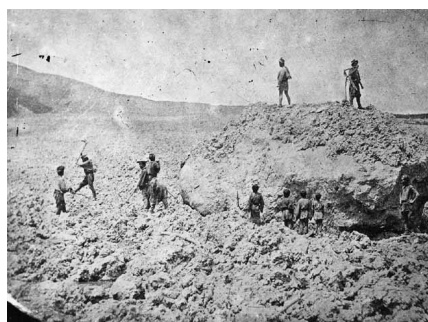


写真 2-6 (竹内写真館所蔵)

(b) ^{しぶたに} 渋谷地区

戸数：30 人口：235名 被害戸数：19 死亡者：3名 (死亡率：1%)

下の図2-13にあるように、沼ノ平から東約3kmに位置し、集落をブラスト(爆風)という非常に強い風が流れ下り、大きな被害を与えた。家屋の破壊の割合に比べて死亡者が少ないのは、爆風が主で見祢地区とは異なり岩屑流(岩なだれ)が少ないことが原因と考えられる。集落は東西に長く、図2-14の斜線部分が家屋を示している(図2-14は福島県地籍図を基に作成)。

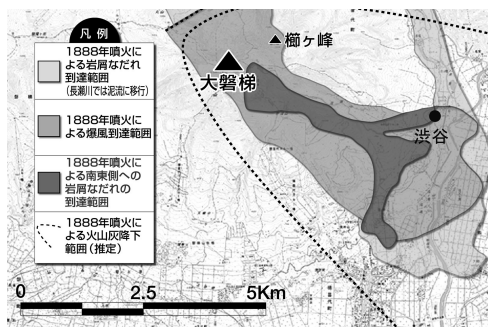


図2-13

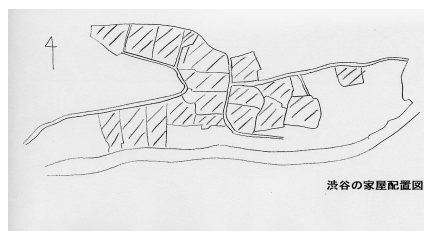


図2-14

渋谷の穴沢清吉、本多熊吉、長谷川源作は、1888(明治21)年10月17日の福島県の聞き取り調査では次のように答えている。

「清吉の時計は20分ほど進んでいて、8時を打つとまもなく西の方よりドウドウと音がして地震が始まった。そのうちだんだん地震が大きくなり、家の者は外へ走り出したが、30間(約50m)ほど行くと磐梯山の上から大砲を打ったような音がドンドンとするやいなや、真黒の煙がまっすぐに打ち上がった。直ちに小磐梯山が抜けたと思い逃げ出した。2丁(約200m)ほど東の方に逃げたが、真っ暗になりしかたなく竦んでいた。川向の白木城しらきじょうに向かって逃げた者は、強い嵐で吹き倒され、起きてはまた倒された。真っ暗の中、砂や小石が降るようにサアサアと音がして、竦んでいると耳や鼻や口にその砂が入り、生气も尽きかねるくらいだった。真っ暗な時間は確かではないが、何でも1時間余り暗かった」(『福島県庁文書』から、現代語訳)。

次のページの写真2-7は国立科学博物館で発見されたものだが、よく見ると倒壊した家屋の周りに多くの人が佇んでいる。当時の家屋は非常に簡単な作りで、家がつぶれてもその重さで人は死ぬようなことは少なかったのではないだろうか。また、1995(平成7)年の阪神淡路大震災とは違い、家財道具も少なく、家具による圧死もほとんどなかったであろう。家屋の倒壊率が60%を超えるのに、死亡率は1%である。写真2-8は宮内庁で発見されたものだが、写真に解説がついていて、「颶風により渋谷の家屋破壊」となっている。非常に強い風のことを昭和初期までは、このような表現を用いた。

宮内庁の写真については、鎌田が第1章4節で詳しく解説している。



写真 2-7 (国立科学博物館所蔵)



写真 2-8 (宮内庁書陵部所蔵)

(c) 長坂地区

戸数：31 人口：168名 被害戸数：1 死亡者：86名 (死亡率：51%)

下の図 2-15 にあるように、小磐梯山の東側の約 4 km に位置するが、櫛ヶ峰が間に位置するため直接の被害は及ばなかった。しかし、北側に流れ出た山体崩壊の土砂が長瀬川に流れ込み、土石流となり南下し、長坂地区の田畑を襲う。つまり、逆さの U 字のような流れであった。猪苗代町では最も大きな被害を受けた。

この地区は年寄りや子どもより、働き手の人々が多く犠牲となっている。当時の新聞は、これを年寄りや子どもを置いて逃げた悲劇などと書いたが、実際は、農作業をしていた場所が長瀬川の側で、居住地が高台にあり、低い場所で仕事をして被害に遭遇したためである。集落は東西に長く、図 2-16 の斜線部分が家屋を示している(図 2-16 は福島県地籍図を基に作成)。

長坂の渡部清吉は、1888 (明治 21) 年 10 月 17 日の福島県の聞き取り調査では次のように答えている。「食事をしていたら地震が始まり、3 つ目のときはズドンズドンという音がして、椀を置いて外へ出ると真っ黒の煙がドンドンと音を出して櫛ヶ峰をモウモウと下ってくるので、山が崩れると思い、外へ走り出した。すると門口で真っ暗になり、門口を出ると直ちに風と土で押し倒されてしまった。風が強くて立っていることもできず、田の傍らにうずくまっていたら、上から波のようになった泥土が来て体にかぶりまた倒された。流されて行く中で太い木につかまり、ようやく畑に這い上がった。噴火が落ち着いて 12 時頃になると明るくなり、村中の人がいないので、あちこち走り回って探した。けが人の数はその日のうちにわかったが、死者の数は 3 日後になってようやくわかった」(『福島県庁文書』から、現代語訳)。



図 2-15

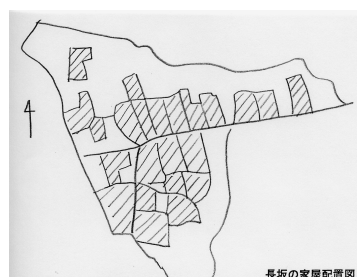


図 2-16

次のページの写真 2-9 は、岩田善平が西側の高台から長坂集落と長瀬川を撮影したものである。

写真2-10の撮影者は不明だが、長坂地区の犠牲者を埋葬したときのものである。写真2-11は岩田善平が長瀬川で撮影したもので、写真2-12は遠藤陸郎が長坂で撮影したものである。共通しているのは、どちらも衣類を身にまもっていないことである。つまり、噴火のエネルギーが衣類を剥ぎ取ってしまう力を持っていたことを示している。

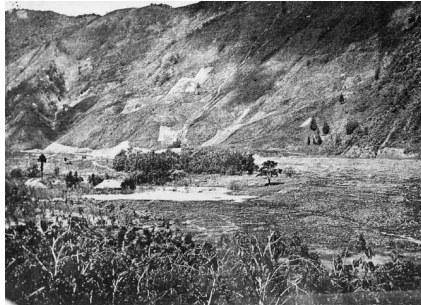


写真 2-9 (竹内写真館所蔵)

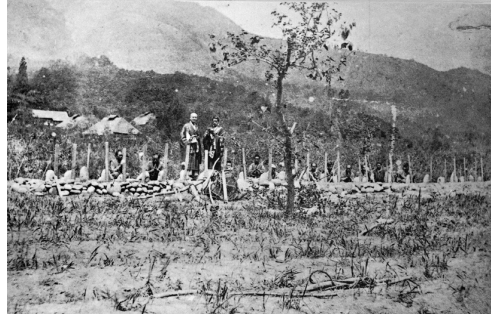


写真 2-10



写真 2-11 (竹内写真館所蔵)



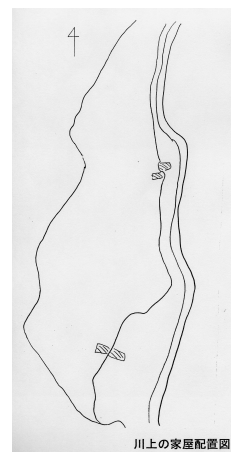
写真 2-12 (福島県立図書館所蔵)

(d) 川上地区

戸数：3 人口：12名 被害戸数：3 死亡者：12名 (死亡率：100%)



図 2-17



川上の家屋配置図 図 2-18

図2-17にあるように、小磐梯山の北東の約4 kmに位置し、山体崩壊の土砂に埋没した。ここは温泉で、当時滞在していた温泉客のことなどはわかっていない。つまり、滞在者の死亡者の正確な数は明らかではない。この12名は住民の数である。集落は南北に長く、図2-18の斜線部分

が家屋を示している(図2-18は福島県地籍図を基に作成)。

写真2-13は国立科学博物館で発見されたもので、写真に着色を施してある。当時は一般的に行われたようである。写真2-14は岩田善平が撮影したもので、どちらもほぼ同じ地点からの撮影だが、川上地区から西側を見ている。温泉の建物は完全に埋没し、どこにあったのかもわからない。



写真 2-13 (国立科学博物館所蔵)

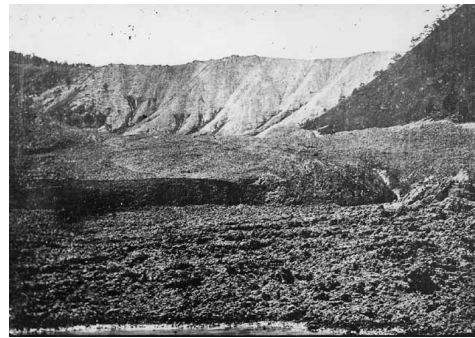


写真 2-14 (竹内写真館所蔵)

c. 若宮村(猪苗代町)
 みょうけ
 名家地区

戸数：25 人口：158名 被害戸数：0 死亡者：15名 (死亡率：9%)

下の図2-19にあるように、小磐梯山の東側の約5kmに位置するが、櫛ヶ峰が間に位置するため直接被害は及ばなかったが、北側に流れ出した山体崩壊の土砂が長瀬川に流れ込み、土石流となり南下し、長坂地区を通り名家地区まで到達する。

集落は東西に長く、図2-20の斜線部分が家屋を示している(図2-20は福島県地籍図を基に作成)。

名家の山田兵吾は、1888(明治21)年10月16日の福島県の聞き取り調査では次のように答えている。

「朝、地震があり、その後激しく揺れ出したとき、大砲を遠くで打つようにドンと地面に響いて、立っていることもできないくらいのひどい地震がした。そのときに皆は外へ出て磐梯山の方を見ると、大磐梯の北の方より黒い煙が真っ直ぐに出たので、山が崩れると思い、直ちに逃げ出した。するとドーンと音がして次にゴウゴウという音がした。そのときには黒い煙といっしょに砂のような灰が降り、風が吹いて黒い煙をまき、一寸先も見えず、灰でむせそうになって倒れたが、およそ15分経つと明るくなったので家に帰った」(『福島県庁文書』から、現代語訳)。

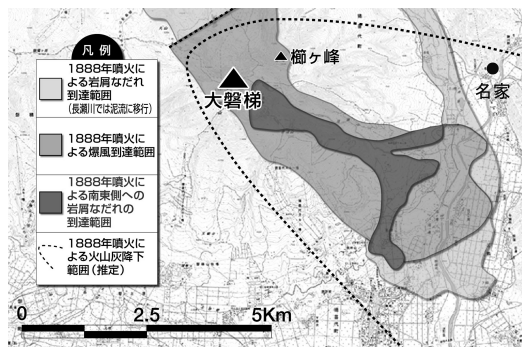
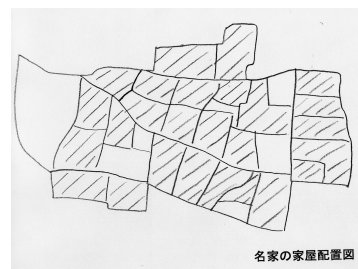


図 2-19



名家の家屋配置図

図 2-20

d. ^{こがい}蚕養村(猪苗代町)

(a) ^{しらきじょう}白木城地区

戸数：21 人口：110名 被害戸数：14 死亡者：3名 (死亡率：3%)

沼ノ平から東南東約7kmに位置し、ブラスト(爆風)という非常に強い風と岩屑流(岩なだれ)が流れ下り、到達した最終地点がこの白木城である。

白木城の武藤喜重は、1888(明治21)年10月19日の福島県の聞き取り調査では次のように答えている。

「自宅から東へ6丁(約600m)ほどの田で仕事をしていたが、家に子どもと年寄りを残してきたので帰ろうと3丁(約300m)ほど走っていくと、既に黒煙にまかれ、嵐は強く家へは帰り着けず、黒煙の中を東に200mほど逃げたが、草野に吹き倒され、15間(約30m)ほど吹きころがされ、堀の中に落とされた。黒煙がせまってくる中、ドンドンという音がし、熱い砂がパラパラと降り、耐えられないほどであった。凡そ1時間で大きな雷がして熱い雨が降り、その後周りは明るくなった」(『福島県庁文書』から、現代語訳)。



写真 2-15 (福島県立図書館所蔵)



写真 2-16 (竹内写真館所蔵)

写真 2-15 は遠藤陸郎が撮影したもので、白木城小学校の倒壊の様子を写している。写真 2-16 は岩田善平が撮影したもので、白木城から西側の磐梯山を写している。噴火3日目でもまだ噴煙を上げている様子がわかる。この写真は北側から見たものとよく勘違いされるが、東側からである。

(b) ^{ひのくち}樋ノ口地区

名家地区の東側に位置するこの地区は、直接の噴火現象による被害はないが、2名死亡している。

(c) 小田地区

名家地区の南東側に位置するこの地区は、直接の噴火現象による被害はないが、4名死亡している。

e. ^{みさと}三郷村(猪苗代町)

^{おじがくら}伯父ヶ倉地区

戸数：41 人口：254名 被害戸数：6 死亡者：2名 (死亡率：1%)

沼ノ平から南東約5 km に位置し、集落の東側をブラスト(爆風)という非常に強い風と岩屑流(岩なだれ) が流れ下り、被害を与えた。

写真 2-17 は小さくてよく見えないが、爆風で吹き飛ばされた屋根を修理しているところである。



写真 2-17

伯父ヶ倉の五十嵐枡次は、1888 (明治 21) 年 10 月 18 日の福島県の聞取り調査では次のように答えている。

「8 時少し前頃、北の方よりゴウゴウという音がして、地震が始まった。3 度目の地震の後、ズドンズドンと音がして黒煙が頂上より真っ直ぐに上がった。また、ドンドンと音がして黒煙が広がった。小磐梯が抜けたと思い、東へ 2 丁(約 200m)ほど逃げたが、後ろから物がドウと打ちかかったようで倒れてしまった。凡そ 1 時間ほどで明るくなってきた」(『福島県庁文書』から、現代語訳)。

f. 猪苗代町

現在の猪苗代町の中心部で、直接噴火の被害が及んだ範囲ではない。しかし、住民の中で磐梯山山麓に農作業で出かけた者を中心に 36 名、湯治客 1 名の計 37 名が死亡している。

g. 磐梯村(磐梯町)

磐梯山の噴火当時、山の北側には湯治のための温泉「上ノ湯」「中ノ湯」「下ノ湯」の 3 つがあり、行政区は磐梯村であった。温泉の位置を文献を基に示すと下の図 2-21 のようになり、余りに温泉の位置が小磐梯に近かったため、助かった人はごくわずかであった。この温泉は江戸時代から続く湯治場で、福島県内だけでなく、県外からも多くの湯治客が来ていた。この湯治客も含め、福島県では全国の県へ手紙を出し、噴火当時、福島県に滞在していて被害にあった者はいないか調査をしている。

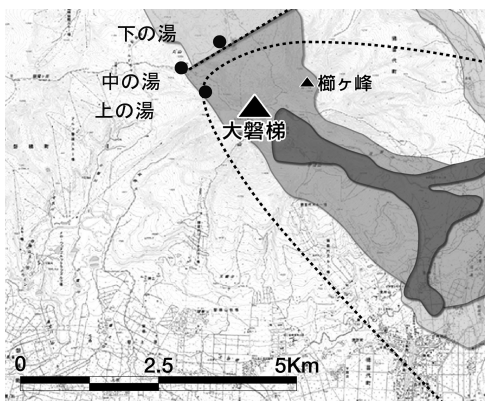


図 2-21

この温泉で亡くなった人は 32 名だが、内訳を詳しく見してみる。

[福島県内] (現在の行政区)

北塩原村：1 名 猪苗代町：1 名
磐梯町：3 名 他の耶麻郡(塩川町) 5 名
喜多方市：7 人 会津若松市：4 名
河沼郡河東町：3 名 双葉郡浪江町：3 名
田村郡船引町：1 名 小計 28 名

[福島県外] 新潟県三条市：4 名 小計 4 名



写真 2-18 (福島県立図書館所蔵)



写真 2-19 (国立科学博物館所蔵)

写真 2-18 は遠藤陸郎が撮影したもので、「上ノ湯」の埋没している様子である。写真 2-19 は国立科学博物館で発見されたもので、「中ノ湯」付近の惨状を示している。

(2) 負傷被害

a. 負傷被害の概要

表 2-2 磐梯山の噴火での負傷者リスト

NO	男女の別	年齢	町村名	集落名	負傷名	入院
1	男		磐瀬村	長坂	頭部及び右前膊裂傷	○
2	女		磐瀬村	長坂	左頭額部筋肉裂傷	○
3	女	49	磐瀬村	長坂	左肩胛右内股打撲外耳炎	○
4	女	64	磐瀬村	長坂	胸部及膝関節打撲	○
5	女		磐瀬村	長坂	頭部及項背部打撲	○
6	男		磐瀬村	長坂	頭部裂傷及全軀擦過傷	○
7	男		磐瀬村	長坂	左膝蓋部裂割及全周回丹毒	○
8	女		磐瀬村	長坂	顔面及鼠蹊部肛裂傷	○
9	男		磐瀬村	渋谷	左足打撲下腿部潰瘍	○
10	男		磐瀬村	渋谷	右大腿骨骨折	○
11	男	30	磐瀬村	渋谷	肩頭部打撲	○
12	男		磐瀬村	見祢	前額裂傷	○
13	女	38	磐瀬村	小田		○
14	女	18	磐瀬村	長坂		○
15	女	31	磐瀬村	長坂		○
16	女		蚕養村	打越	左鎖骨脱臼	○
17	男	30	千代田村		右上膊骨及左大腿骨複雑骨折	○
18	男		千代田村		項背面肩胛打撲	○
19	女		若宮村		右下脚刺創	○
20	女	19	猪苗代町		前額及肘関節足裂傷	○
21	男		磐瀬村	見祢	頭部裂傷	○
22	女	48	新潟県			
23	男	21	新潟県			
24	男	45	新潟県			
25	男	58	新潟県			
26	男	33	新潟県			
27	男	60	河東町			
28	男	23	河東町			

(福島県庁文書「事変取扱二関スル書類」により作成)

磐梯山の噴火では、死亡者に比べ負傷者が非常に少ないことが特徴である。

これは、被害地域に住む人口が少なく、岩屑流(岩なだれ)と水蒸気爆発による土石流が、その居住地を短時間で襲い、逃げる時間がなくて死亡する確率が高かったことが原因と考えられる。

また、当時の資料(福島県庁文書)には入院した負傷者は掲載されているが、自宅療養のものは省略されていて、その実態が明らかにならなかった。つまり、負傷者の全体数が把握されていないことも、その数が少ない1つの要因である。入院患者の負傷名を見ると、火山の爆発的エネルギーの大きさを感じる。

この負傷者の中に「中ノ湯」へ湯治で来ていた新潟県南蒲原郡井栗村(現在の三条市)の来迎寺の住職、鶴巻浄賢がいる。

彼は噴火をその最も近くで体験した人間で、そのときの様子を次のように報告している。少し長いが現代語に訳して抜粋する。

彼は噴火をその最も近くで体験した人間で、そのときの様子を次のように報告している。少し長いが現代語に訳して抜粋する。

「7月8日、当村の者と四名で磐梯山へ出発し、12日午後4時、磐梯山中ノ湯に到着する。そのとき入浴客は40名ほどいたが、翌日より少しずつ減っていった。自分は明治18年7月に3週間この地で入浴したが、本日は前回より霧が深く、上ノ湯近辺は湯気が上るのは少なかった。13

日、早朝より霧が一層深く夕方まで晴れなかった。お湯は普通より少し増えたようである。

14日、天気は晴朗で霧はなかった。この日10時頃からお湯の出る量が少し減った。

もっとも晴天のときはお湯は減って、雨天時は増加するので、午後3時頃に著しく減少したことも通常のことと思っていた。何も怪しんだりはしなかった。

15日、前日同様天気は晴朗であった。お湯の量もさして変わったようなことはなかった。この日8時頃大地震となり、一同大いに驚いて小屋より飛び出した。10分ばかり経って、上ノ湯より100mほど上に、普通湯気の出る所があるが、その辺と思われる所から大砲3挺ほどが一度に発射されたほどの大きな音が聞こえ、黒い煙が一度に立ち昇り、山崩れの音はすさまじく、言葉では言い表せないほどで、瞬く間に黒い煙が空を覆い、大小の石が絶え間なく落ちてきて、我々は思い思いに四方に逃げ出したが、9m、13m、18mくらいで全員地面に伏せた。このときは何も見えず、全くの暗闇となり、地震は止まらず、耳、目、鼻、口などに土砂が入り、声を出すことも吐き出すこともできず、生きた心地が少しもしなかった。夢中であったため、だれだったかは覚えていないが、右の手に石が落ちたときは、これは傷ついたと思った。続いて腰や右足、背中にも傷を負い、その後1時間ほど経って、石が落ちてくることも取まり、暗闇もようやく薄らぎ、おぼろ月夜くらいになった頃、逃げるのはこの時しかないと思い、急いで逃げ出すと、200mほど下るときに2番目の破裂があり、300mほど下るときに3番目の破裂があり、そのときは土砂だけが体にかかり、噴石はなかった。昼の12時頃に大寺(現在の磐梯町)に到着して、ここで医者の治療を受けた」(『磐梯山破裂実況取調報告』より)と克明に噴火の様子や被害の様子を語っている。

b. 治療について

負傷者の治療については、噴火当日の夕方までに収容された人は、猪苗代分署と猪苗代小学校の校舎の一部を治療所として行われた。また、被害者の一番多かった長坂地区では、地区内に仮の病室を設置し緊急の治療にあたった。その後、順次全治または自宅療養などにより、負傷者は減少し、1888(明治21)年7月25日以降は日新館(猪苗代町)に治療所は移された。その後、入院治療は8月14日で終了し、重傷者4名は福島病院へ移送された。治療中に伝染病に感染し隔離される者もあり、治療所の運営は困難を極めた。入院中に12名の死亡者があり、いかに被害が悲惨であったかがわかる。入院患者総数が49名であるから、24%の死亡率となる。



図 2-22 「猪苗代応急処置をする
医師 1888 年」(宇都宮美術館所蔵)



図 2-23 「猪苗代被災者を手当する人
びと 1888 年」(宇都宮美術館所蔵)

この2枚の絵は当時日本に滞在していた風刺画家ジョルジュ・ビゴーが描いた治療風景のスケ

ッチである。ビゴーは日清戦争を風刺した「魚釣り遊び」が有名だが、このように、当時の庶民の人々を数多く描いていて、明治を証言する貴重な資料となっている。

c. 治療に携わった人々

噴火当初は地元の開業医の六角謙三や渡辺誠一郎、宇南山壽庵が担当した。その後、福島病院から副院長の北村徐雲、医師の星清記、耶麻郡医の桜井於兔吉などが加わった。

また、磐梯山の噴火では日本赤十字社から医師の土肥淳朴、小山善、大森英郎の3名が派遣された。戦争における救護が目的で作られた日本赤十字社が戦争以外で医師を派遣した初めてのケースであった。

また、東京帝国大学の医学生、芳賀栄次郎と三輪徳寛が自費で磐梯山へ駆けつけている。これは災害ボランティアの先駆けとなった。

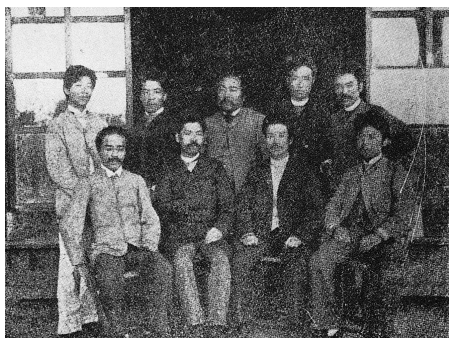


写真 2-20 (東京大学医学図書館所蔵)



写真 2-21

写真 2-20 は治療にあたった医師たちで、向かって後ろの右端が三輪徳寛でその隣が芳賀栄次郎である。写真 2-21 は治療風景である。どちらも撮影者は不明である。



写真 2-22



写真 2-23 (宮内庁書陵部所蔵)

写真 2-22 も 2-23 も撮影者は不明であるが、どちらも病院風景を写している。

芳賀は帰京後、この治療した経験を「磐梯山潰裂ニ因テ生ゼシ創傷報告」として「東京医学会雑誌」に報告する。図 2-24 はその報告書に記載されたものである。



「創傷には擦過傷、挫傷、裂傷、失肉傷、剥離傷があり、その多くは裂傷と失肉傷であった。挫傷及び裂傷は創縁広く破開してあたかも切傷のようであり、失肉傷は皮膚筋肉ともに消失して、あたかも、のみと槌を用いて剥出したようであった。そして、この女性と同じく、長髪を束ねた欧州の女子工員が機械車輪に触れてよく同じような剥離創になる」と報告している。これは日本における火山噴火に伴う最初の症例報告であろう。

図 2-24 東京医学会雑誌第 2 巻第 21 号
(東京大学医学図書館所蔵)

(3) 家屋の被害

表 2-3 家屋の被害

町村名	字名	総戸数	被害戸数	被害率
檜原村	雄子沢	20	20	100
檜原村	細野	7	7	100
檜原村	秋元原	12	12	100
檜原村	小野川	12	12	100
檜原村	檜原	51	0	0
小計		102	51	50
磐瀬村	長坂	31	1	3
磐瀬村	渋谷	30	19	63
磐瀬村	見祢	49	18	37
磐瀬村	川上	3	3	100
小計		113	41	36
若宮村	名家	25	0	0
小計		25	0	0
蚕養村	白木城	21	18	86
蚕養村	樋ノ口	13	0	0
蚕養村	小田	73	0	0
蚕養村	小水沢	20	2	10
小計		127	20	16
三郷村	伯父ヶ倉	41	6	15
小計		41	6	15
合計		408	118	29

(福島県庁文書「事変取扱二関スル書類」により作成)

集落全体が山体崩壊の土砂に埋没した檜原村の 3 つの地区は当然だが、被害率は 100% となる。死亡率も高い。

(4) 田畑の被害

表 2-4 田畑・山林の被害 (単位はヘクタール)

町村名	字名	畑	田	宅地	山林
檜原村	雄子沢	2.52		0.53	
檜原村	細野	0.99		0.21	
檜原村	秋元原	12.4		0.82	
檜原村	小野川	1.83		0.36	
檜原村	檜原				
小計		17.74		1.92	
磐瀬村	長坂	31.4	8.81	1.73	101.14
磐瀬村	渋谷	26.45	10.9	2.8	97.22
磐瀬村	見祢	19.77	3.81	3.38	162.42
小計		77.62	23.52	7.91	360.78
若宮村	名家	25.11			
小計		25.11			
猪苗代町					1887.9
磐梯村					
合計		120.47	23.52	9.83	2248.68

(福島県庁文書「事変取扱ニ関スル書類」により作成)

檜原村は寒冷地のため、田は存在しなかった。

(5) 家畜の被害

当時の農業における牛や馬の役割は、農耕と運搬と肥料の生産であった。機械のない時代であるから、現在の役割に比べはるかにその重要度は高かったのであろう。そのため、人間の死傷者の次にこの家畜の被害が記されたのであろう。

牛：43 頭(檜原村：3 頭 猪苗代：40 頭)

馬：57 頭(檜原村：4 頭 猪苗代：53 頭)

第2節 応急対応

初動救助

福島県庁文書に残されている聞き取り調査によると、地元住民たちは噴火後の動転した心を抑えて、近所の人々の負傷の世話や死体捜索にあたっていた。

「心が落ち着くと死体捜索や負傷者の手当てをしておりました。けが人を集めておりますと役場の職員と警察官と医者3名が来ました。当日の負傷者は5名で猪苗代町へ送りました。翌日は負傷者8名を猪苗代町へ送りました。7月16日、17日、18日と死体捜索をしておりまして、他には何もできませんでした」(長坂の渡辺房平・磯谷栄作・渡部清吉らの聞き取り調査から現代語に訳して抜粋する)。

(1) 噴火の通報

a. 第1報 猪苗代町外十ヶ村役場戸長遠藤直喜から耶麻郡長瀬高龍人へ
噴火当日の午前9時40分に出された文章を現代語に訳して紹介する。

「今日15日午前8時10分頃、地震が発生し、8時56分頃、とても強い地震が発生し、おりから西の方角の2か所から大砲のような大きな音がして、そちらを見ると磐梯山で噴火をしていた。噴煙が磐梯山を巻き、その震動はたとえるものがないほどの大きさであった。町内に住む者たちは老人や子どもを背負い、財産は持たず全員南の方角に走った。山で働いていた人の生死は未だにわからない。目下、被害を被っているのは、^{いわせ}磐瀨村の^{みね}見祢地区において、家屋が倒壊しているのが56戸である。人や馬の亡くなった数は定かではない。幸い寺沢書記官が当地に出張中で、救助その他の手配を十分に行われた。取り急ぎご連絡いたします。追って県庁へ直ちに電報を打ちます。」

b. 第1報 北会津郡役所から福島県庁へ

本来、連絡を受けた耶麻郡長から福島県庁に電報を打つべきところだが、耶麻郡役所は喜多方にあり、磐梯山が直接見えない場所で、状況把握が遅れたのであろう。代わりに会津若松にあった北会津郡役所からは磐梯山がよく見えて、福島県庁に第1報の電報が図2-25のように打たれた。

ワカマツ分局発 明治21年7月15日 午後4時55分

「ホンニチ ゼンシチジハンゴロ ヤマグン
バンダイサン ウシロ ハレツ フンカセリ」

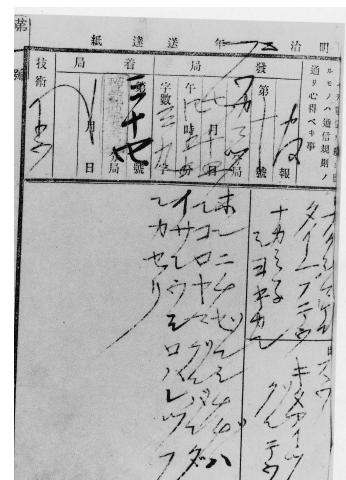


図2-25 (福島県歴史資料館所蔵)

c. 福島県庁から内務省への電報

噴火当日のうちに、福島県庁から内務省宛で電報が打たれた。これが翌日の官報に掲載され、合わせて新聞各社にも伝えられた。7月16日は新聞休刊日のため、第1報は7月17日に掲載された。

(2) 行政の対応

a. 災害対策の組織

この磐梯山の噴火に対して福島県は、災害発生が耶麻郡であったため、対応の中心は耶麻郡役所があたった。また、発生当初から郡書記の赤埴清直を県庁に派遣させ、県との打合わせを密に行われた。

対策のための事務所は、耶麻郡猪苗代町外十ヶ村役場に仮事務所が置かれ、郡長ほか6名があたった。業務内容は次のようなものであった。

- ・ 土木関係
- ・ 被災者救助施設建設工事
- ・ 被災者救助病院会計
- ・ 被災者救助名簿
- ・ 被災者救助施設建設

また、猪苗代町役場にも5名の担当者が置かれた。

一方、福島県警察部では、救護と警備を中心に9名体制で、猪苗代警察分署に本部を置いた。また、死体捜索や負傷者取扱などで、近隣の耶麻郡警察署や河沼・北会津・本宮・安達・安積・田村・岩瀬・西白河の各署から巡査43名を現地に派遣した。

なお、福島県知事折田平内は17日に現地に入り被害地を検分し、20日に報告書を国に上申した。この中で救護については、以下のように取り決めた。

1. 死屍捜索及び埋葬手続
2. 負傷者治療其他手続
3. 罹災者救助手続
4. 救助金支給手続
5. 水路流及田地灌漑方法

この5項目を目的として、その実施方法が具体的に定められた。

福島県庁文書には、この事務処理の規定が次のように定められている（現代語に訳す）。

「磐梯山噴火の異変は、以前にも類する物事がなく、将来にもなかりうと思われる（前代未聞）ことで、被害は非常に大きいものがある。これ〔事変による臨時事務処理目算調書〕で救済事務を始めるが、その他あらゆる方面の施設に係わるものは複雑で多岐にわたっているため、処理を遅くするか早くするかを推しはかり、将来を考えて目的の順序を決め、手遅れにならないようにすれば、数多くのこと、あるいは処理は道理にかなうものが多いだろう。まして例外の臨時事務が多いので、この調書ではじめから施設や方法を前もって見込みを持ってあたり処理を適切なものとして、事務が滞ることはないようにしなければならない。そのために、保安保護上に関する事務は警察官、救助に関するものは庶務課員、水利土木に関するものは土木課員、前の数項目の予算に関するすべての事項は議事課員が分担することはいうまでもないことだが、今より後事務の整理を定めるため、ここにその目的を定めるものである」。

この実施にあたり、調査項目を次のように選定した。

1. 被害各村・戸数・人口及び寄留戸数人口、ただし各人名に年齢を記入し、死亡・負傷を区別する。
2. 被害家屋調査
3. 被害田地及び山林について反別に調査
4. 田地用水不足について反別に調査
5. 家屋破壊並びに埋没者の小屋掛の調査
6. 死傷する牛馬の調査

これらの基準に基づいて、救助活動がすすめられた。

更に福島県は7月23日に、民心の安定のために被害地域に知事の論達の告示を行った（現代語に訳す）。

「磐梯山噴火の異変は、人間の知恵で予想できることではなく、この後どのような有様になっていくのか、心を痛めています。今回専門家の調査では、元来磐梯山は重水蒸気の作用で崩壊したもので、一度噴火した後は、再び変動を起こす心配はありません。また噴火のための土砂で埋まった檜原川上流地域に、水が溜まった地形ができましたが、山間3・4里は大きな岩で塞がれているので、万一でも暴れ出して被害が起こることはないという鑑定です。そういうわけですから、みなさん本業に戻って家業に精を出すように、被害にあった人をはじめとして村民に諭し示してください」。

b. 死体の処理

死体の捜索は警察官の35名が2人一組となり、一組4名の人夫を連れてあたる。また、発見者の通報などにより、警察署からの担当者とお夫が処理にあたる。7月という夏の季節のため、死体の腐敗は激しく、発見場所の近くに仮埋葬し、その都度、各役場に公示し、家族からの申出を待つという方法が取られた。身元が直ちに判明する者もいたが、死体は裸で見つかる場合が多く、また分断されていたり腐敗していたり、判別が困難な場合も多かった。次にそのデータを示す。

この表2-5にもあるように、磐梯山の北側の集落を厚い堆積物が覆ってしまった関係で、北側の地域での遺体の

表 2-5 遺体発見の有無を含むデータ

現在の行政区	町村名	字名	死亡総数	死体発見数			死体未発見数	死体発見率
				姓名判明	姓名不明	合計		
北塩原村	小計		234	1	3	4	230	1.70%
	檜原村	雄子沢	105	0	0	0	105	0.00%
	檜原村	細野	42	1	0	1	41	2.40%
	檜原村	秋元原	67	0	0	0	67	0.00%
	檜原村	小野川	4	0	0	0	4	0.00%
	檜原村	檜原	10	0	3	3	7	30%
	中計		178	64	45	109	69	61.20%
猪苗代町	中計		86	36	40	76	10	88.40%
	磐瀬村	長坂	3	3	0	3	0	100%
	磐瀬村	洗谷	14	4	0	4	10	28.60%
	磐瀬村	見祢	12	3	5	8	3	66.70%
	磐瀬村	川上	115	46	45	91	23	79.10%
	若宮村	名家	15	3	0	3	12	20%
	若宮小計		15	3	0	3	12	20%
蚕養村	蚕養村	白木城	3	2	0	2	1	66.70%
	蚕養村	樋ノ口	2	0	0	0	2	0.00%
	蚕養村	小田	4	4	0	4	0	100%
	蚕養小計		9	6	0	6	3	66.70%
	三郷村	伯父ヶ倉	2	0	0	0	2	0.00%
三郷小計		2	0	0	0	2	0.00%	
猪苗代町	町内全体		37	9	0	9	28	24.30%
	磐梯村		3	0	0	0	3	0.00%
磐梯町	被害地外で耶麻郡内		12	0	0	0	12	0.00%
	耶麻郡外の者		38	4	0	4	34	10.50%
合計			465	69	48	117	348	25.20%

福島県庁文書「事変取扱二関スル書類」により作成

発見率は低い。また、遺体発見の約4割が姓名が不明で、この磐梯山の噴火の恐ろしさを痛感する。

参考文献

- 1) 磐梯山噴火関係書類：福島県歴史資料館.
- 2) 磐梯山噴火百周年記念誌：磐梯山噴火百周年記念事業協議会.
- 3) 北原糸子：磐梯山噴火，吉川弘文館，1998年12月20日.
- 4) 小桧山六郎：新磐梯紀行，歴史春秋社，2002年12月25日.
- 5) 山田信夫：磐梯山の噴火と長瀬川の泥流，文化書房博文社，1988年1月30日.
- 6) 磐梯山噴火百年史部会編集：磐梯山破裂セリ，歴史春秋社，1988年1月30日.
- 7) 磐梯山噴火記念館：磐梯山の怒り1888，1998年4月15日.
- 8) 宇都宮美術館：ビゴー，1997年1月5日.
- 9) 東京医学会雑誌第2巻第21号：東京大学医学図書館.

第3節 供養碑の分布と慰霊祭

1 死亡者の供養

磐梯山の噴火で亡くなった人は477名と明治以降では、日本における最大の火山災害であった。そのため、死没者を供養し、磐梯山の火山災害を継承するために各地域で供養碑が建立された。また、慰霊祭が各地域で継続的に実施されている。

2 慰霊祭関係

(1) 北塩原村の場合

- ・ 1888(明治21)年11月18日 ^{おし}雄子沢において死亡者慰霊祭
大塩村外一ヶ村戸長役場と民間有志によりとり行われる
- ・ 1889(明治22)年7月15日 檜原村道前原において一周年供養祭
- ・ 1970(昭和45)年より、先人供養慰霊祭も兼ねて「裏磐梯火の山まつり」を開催。現在も継続中
- ・ 1985(昭和60)年より、檜原地区で被災者の鎮魂のまつりとして「ひばら湖まつり」を開催し、現在も継続中
- ・ 1988(昭和63)年7月15日 磐梯山爆発100周年記念追悼会を開催

(2) 猪苗代町の場合

- ・ 1888(明治21)年9月24日 西圓寺において横死者の供養が行われる
- ・ 1889(明治22)年7月15日 西圓寺において一周年供養祭
- ・ 1890(明治23)年 ^{あづまさん}吾妻山神社において磐梯山噴火慰霊祭を開催
- ・ 1920(大正9)年 天徳寺において噴火三十三回忌法要を行う
- ・ 1937(昭和12)年7月15日 天徳寺において噴火五十回忌法要を行う
- ・ 1957(昭和32)年7月31日 磐梯山爆発70周年記念追悼会を開催
そのとき「磐梯まつり」と合流し現在も継続中
- ・ 1988(昭和63)年7月15日 磐梯山爆発100周年記念追悼会を開催

3 供養碑や慰霊碑の建設

(1) 北塩原村の場合



写真 2-24 磐梯山破裂罹災死没之墓 (写真 2-24～写真 2-30 佐藤公撮影) 1889(明治 22)年 6 月 檜原村道前原に建設 ①



写真 2-25 磐梯山噴火百年記念供養碑 1988(昭和 63)年 檜原村道前原に建設 ②



写真 2-26 磐梯山噴火非命供養 1894(明治 27)年 6 月 檜原村雄子沢 ③

<その他>

- ・ 磐梯山噴火災死之人碑 大正時代 遠藤現夢が五色沼に建設
- ・ 磐梯山噴火百年忌供養之碑 1987(昭和 62)年 7 月 15 日 五色沼に建設 ④
- ・ 日本赤十字平時における救護活動発生の地 1988(昭和 63)年 五色沼に建設 ⑤

(2) 猪苗代町の場合



写真 2-27 殉難之精霊 猪苗代町 長坂 ⑥



写真 2-28 磐梯山災死者招魂碑 1892(明治 25)年 7 月 福島県は全国からの義捐金にこたえるため、土津神社参道に建設 ⑦



写真 2-29 磐梯山破裂罹災死没之墓 1889(明治 22)年 10 月 西園寺境内に建立 ⑧



写真 2-30 招魂之碑 1894(明治 27)年 9 月 磐梯山爆発による死亡者 7 年忌の記念に西勝寺建立 ⑨

磐梯山噴火に関する墓や慰霊碑の所在地

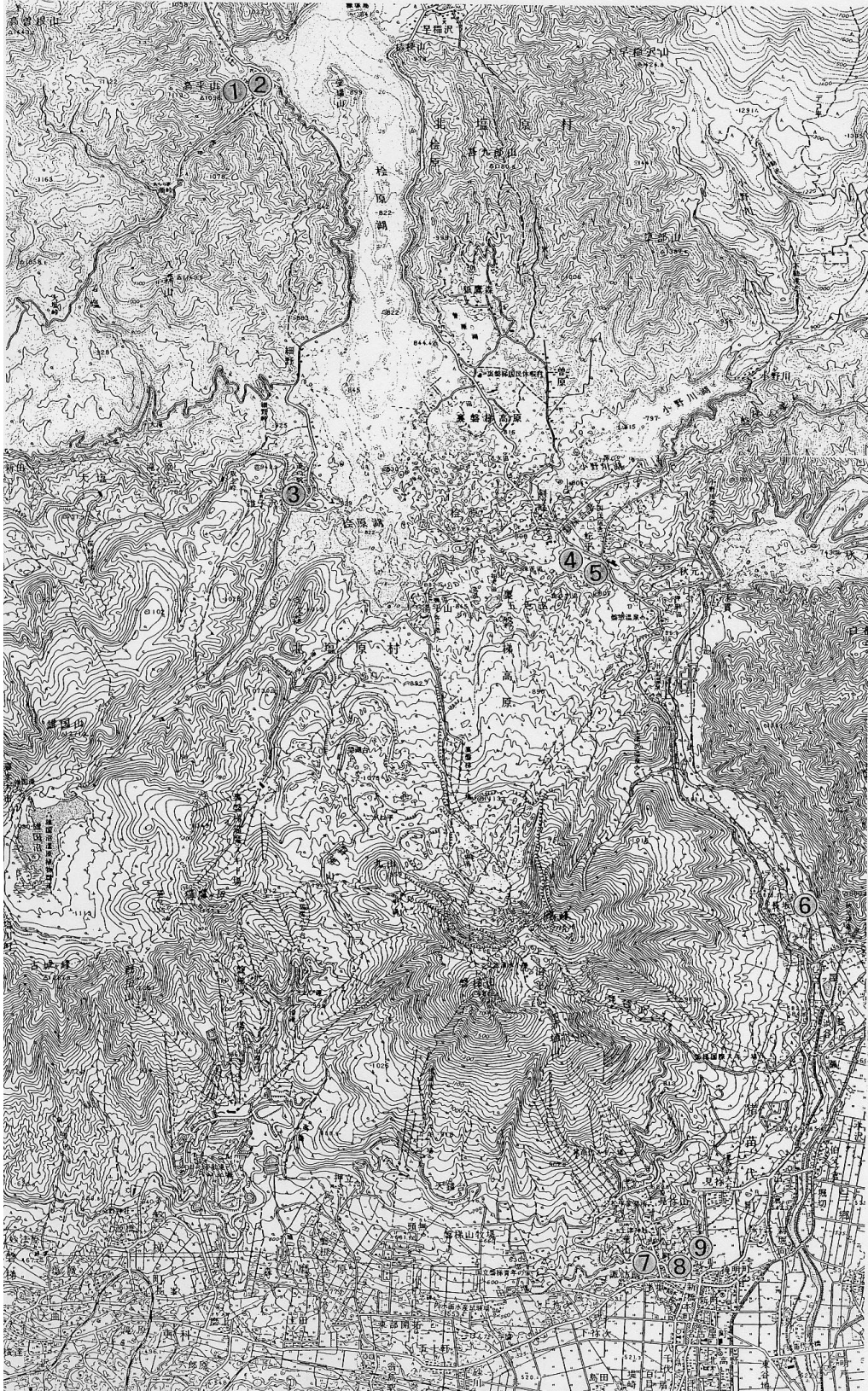


図 2-26 国土地理院発行 1/50,000 地形図 吾妻山、磐梯山に所在地を示す

第4節 資料にみる磐梯山噴火

1 はじめに

今日のように科学的知識や情報手段が豊富ではない時代、磐梯山噴火に遭遇した人々の驚愕ははかりしれないものがある。現在社会では、様々な媒体によって、被害の諸記録や個人の体験談を入手することは容易であるが、1888（明治 21）年の磐梯山噴火はどのような状況であったのだろうか。

残された資料は、当時の行政資料と学術論文に限られており、実際に被害にあった人々の生の声を反映した記録は極めて少ない。まして噴火直後の生死の危機に見舞われた大混乱のなかでは、多くの被災者の声を記録するということがかなわなかった。

本節では、こうした限られた資料から被災者の声と体験を可能な限り拾い出す作業を行った。よもや日常の生活のなかで考えもつかなかった磐梯山噴火という未曾有の被害のなかで、人々が何を考え、行動したのかを浮き彫りにすることを目的とした。

2 行政資料の所在

1888（明治 21）年磐梯山噴火に関する行政資料の大部分は、福島県歴史資料館に残されている。この資料群は、福島県史編纂委員会が1965（昭和 40）年 3 月に発行した『福島県史資料所在目録 第 1 集——明治・大正期の福島県庁文書——』に所収されている。

磐梯山噴火に関する文書は、庶務の項目に 19 件、土木に長瀬川が 1 件ある（表 2-6）。磐梯山の噴火に関する基礎的な文書である 20 件中、義援金関連が半数を占める。

冊簿は各冊の厚みが十数 cm に及び、当時の電報を含む様々な形態の文書類が綴り込まれている。既に刊行が完了した関連地域の自治体史や『磐梯山噴火百周年記念誌』には主要な一部が紹介されているが、全貌は明らかになっていない。

今回の調査では、今後の活用を視野にいれて、目次が添えられているものについては、1 件ごとに項目を書き出した。

目次は約半数の冊簿にあるが、関連性の高い F1101・1502～1504・1512 については内容目次を作成した（資料 1）。

表 2-6 福島県庁文書（磐梯山噴火関係）の概要

No.	書架番号	年代	タイトル	内容	目次	絵図	被害	復興	義捐金
1	F1101	3574 明治21	磐梯山噴火事変ニ関シ臨時事務分掌決議		○		○		
2	F1502	なし 明治21	磐梯山噴火事変取扱ニ関スル書類		○		○		
3	F1503	なし 明治21	磐梯山噴火事変取扱ニ関スル書類		○	○	○		
4	F1504	なし 明治21	磐梯山噴火事変取扱ニ関スル書類		○		○		
5	F1505	1475 明治21	磐梯山噴火関係書類				○		
6	F1506	1476 明治21	磐梯山噴火関係書類				○		
7	F1507	1477 明治21	磐梯山噴火罹災者義捐人名簿	義捐金の額・氏名・住所					○
8	F1508	1478 明治21	磐梯山噴火義捐人名簿附録	義捐金の額・氏名・住所					○
9	F1509	1479 明治21	磐梯山噴火義捐人名簿	義捐金の額・氏名・住所					○
10	F1510	1480 明治21	磐梯山噴火義捐人名簿	義捐金の額・氏名・住所					○
11	F1511	1481 明治21	磐梯山噴火罹災者義捐人名簿	義捐金の額・氏名・住所					○
12	F1512	1426 明治21	磐梯山噴火事変儀捐金	義捐金関係+明教新誌+他	○				
13	F1513	1482 明治21	磐梯山噴火罹災救助儀捐金	義捐金の額・氏名・住所	○				○
14	F1514	1483 明治21	磐梯山噴火罹災救助儀捐金	義捐金関係+他	○				
15	F1515	1484 明治21	磐梯山噴火儀捐金	義捐金関係+他	○				
16	F1516	1485 明治21	磐梯山噴火事変儀捐金	義捐金関係+他	○				
17	F1517	1486 明治21	磐梯山噴火事変儀捐金	義捐金関係+他	○				
18	F1518	1487 明治21	皇典講究所義納金書類 磐梯山噴火罹災者へ土地樹木下与	義捐金関係とその給付				○	
19	F1519	1488 明治21~25	磐梯山噴火罹災者へ土地樹木下与	土地樹木給付・官有地貸渡		○			○
20	F2087	3390 明治21	長瀬川治水計画	土第6号		○			○

(福島県歴史資料館所蔵)

3 「磐梯山爆発罹災者に対する聴取書」にみる噴火の実態

『磐梯山噴火百周年記念誌』に所収されている「磐梯山爆発罹災者に対する聴取書」（福島県庁文書 F1503-76）は、実際に被災した地域の人々の体験が記された数少ない貴重な資料である。淡々とした供述のなかに惨事にあつた恐怖と心情が語られている。

更に各地区における被害の内容や登場する地名から、噴火による被害の進行や実態などが推測できる記述があり、今後の活用の可能性は高い。

(1) 作成経緯

「磐梯山爆発罹災者に対する聴取書」（以下「聴取書」）は、聞き取りは噴火後2か月後、現在の2自治体（北塩原・猪苗代）9地区（旧村単位）の住民に対して行われた。

原題は「磐梯山噴火口述進達之義ニ付上申」、本文は「本郡磐梯噴火景況近村被害者申立ヲ筆記センメ候処、別紙之通ニ候條、此段及報告也」とあり、1888（明治21）年11月7日付で、耶麻郡長瀬高龍人が、福島県知事山田信道代理の福島県書記官永峰弥吉に提出したものである。知事折田平内の決済日は11月10日である。

聴取書は、磐瀬村見祢から檜原村本村まで9地区の被害者本人に対して質問形式で行われ、耶麻郡書記汲田貞次郎が筆記したものである。

(2) 内容

聴取書は質疑応答方式を取っている。質問内容は該当する9地区によって若干異なるが、基本的な質問内容は、以下の7点である。

- ① 噴火前の気候、例年との違い、天気

- ② 噴火前の山鳴り・地震
- ③ 噴火の前兆
- ④ 噴火時の様子
- ⑤ 明るくなってからの様子
- ⑥ 噴火後の地震
- ⑦ 噴火の変事

聴取書は、カタカナ混じりの文で大変読みにくく、方言も混じるため、文意を損なわない程度で口語訳したものを紹介した。また各被災者が噴火にあった場所も判明する者は明記した。特に答弁中に出てくる、噴火時のさまざまな音、地名には着目した。今後、各地区の噴火時の再現に何らかの手がかりを与えてくれるだろう（資料2）。

以下、各項目について概略を述べる。

- ① 噴火前の気候、例年との違い、天気

気候 7月10～15日間の質問である。

地区によって4パターンある。

7月10～14日（雄子沢・檜原本村・大島原）

10～15日（長坂・名家）

12～14日（伯父ヶ倉）

12～15日（見祢・渋谷・白木城）

例年との差 半数が暖かいと感じている。

天気 大きな差はないが、地区ごとに微妙な変化がある。

- ② 噴火前の山鳴り・地震

山鳴り ないという地区がほとんどである。

地震 5地区で感じている。

渋谷・長坂 10日前

白木城 7月10日夜

大島原 7月11日午後2時

- ③ 噴火の前兆

檜原本村 檜原川の魚がとれない。

渋谷 正月下旬、小磐梯山手前のグミ沢に兎追いに行くと、雪がぬかり歩行できなかつた。

白木城 鳥鳴きが悪く、15日朝は大変鳴いた。

伯父ヶ倉 兎が13、14日東吾妻山へ逃げたという。

大島原 ホトトギスが10日ほど前から鳴かなかった。

6、7月にはみかけない兎が川端・河原にいた。

3月、例年より早く磐梯山に雪が消えた。

噴火前夜、馬が暴れて馬小屋から逃げた。

④ 噴火時の様子

各村の生々しい罹災の様子が語られている。噴火前の山鳴り・振動・破裂音・土石などの音に着目した。

⑤ 明るくなってからの様子

⑥ 噴火後の地震

檜原本村・見祢・渋谷・白木城で8月12日に感じている。

⑦ 噴火の変事

暖気があげられている。

檜原本村 噴火後かなり暖かになった。

見祢 暖気が例年より2℃ほど暖かい。特に藤の花が咲いたのは不思議だと話していた。

白木城 暑気はかなり強い。青葉がなくなったためと思う。

伯父ヶ倉 いろいろな花が咲いたが、噴火後暖かになったためと思う。

聴取書には噴火後、再び噴火があるという風聞や長瀬川の閉塞に伴う水害のため、日々不安ななかにも、復興に向けて生活する人々の姿をみることができる。

上記質問項目のうち①②④⑥について地区ごとの比較のため一覧表を作成した(表2-7)。さほど離れた地域ではないが、地区によって気温や天気の微妙な差があることがわかる。また前兆の地震の認識も必ずしも一致してはいない。日常の個人の記憶がまちまちであることがわかる。それでも噴火について数少ない地元からの被害調書であるという意味で、貴重な資料であることにはかわりない。

表 2-7 聴取書にみる被害の様子

項目	質問内容	猪苗代							北塩原	
		1	2	3	4	5	6	7	8	9
		見祢	渋谷	名家	長坂	白木城	伯父ヶ倉	大島原	雄子沢	檜原本村
		磐瀬村	磐瀬村	若宮村	磐瀬村	蚕養村	三郷村	檜原村	檜原村	檜原村
①	噴火前の気候 7月	12~15日	12~15日	10~15日	10~15日	12~15日	12~14日	10~14日	10~14日	10~14日
	例年との違い	ない	例年より2・3℃ 暖か	80~85℃・ない	蚊が多く少し暖か	70~80℃・ない	76℃位・ない	ない	ない	少々暖か
	天気・11日		雨	雨が降ったが 日は覚えなし	雨	雨		2・3日前に雨が 降ったがよく覚え なし	大雨	
	12日		雨		少々雨	雨3時すぎ晴	少々雨		朝まで雨	雨
	13日		曇		朝と昼に雨	曇2時すぎ少々 雨	午後少々雨		晴	雨
	14日		晴		晴	晴	曇		晴	曇
	15日		晴		晴	晴			晴	少々曇
16日									少々曇	
②	噴火前の山鳴 鳴動	ない	ない		ない	ない	ない		ない	—
	地震	ない	10日前に大分 大きい地震があ った	ない	10日前に大分 大きい地震があ った	7月10日夜 少々地震があ った	ない	11日午後2時 頃地震があっ た	ない	
④	噴火前の山鳴	ドゥードゥー								
	振動		ドウドウ	ドン	ドウドウ	ドウドウ	ゴウゴウ・ゴー	ゴウロゴウロ	ドウドウ	ドウドウ
	破裂音	ドーン	ドンドン	ドゥーン	ズドンズドン	ドンドン	ズドンズドン	ドウンドウン	ドウンドウン	ズドンズドン
		ドンドンガラガラ	バリバリ		ドンドン	ドン	ドンドン			
	土石			ゴウゴウ	ドドウゴウ			ガラガラ		ゴウゴウ
⑥	噴火後の地震	8月12日午前 11時過ぎ	8月12日午前 11時頃	ない	—	8月12日午前 11時過ぎ	2度あったが不 明	—	ない	8月12日

(福島県庁文書 F1503-76 より作成)

特に例年との違いで、暖気があげられている点、③の噴火前の前兆については注目すべきであろう。

4 元朝院文書にみる噴火の実態

『磐梯山噴火百周年記念誌』には、磐梯山噴火に関して現地で記された数種の報告書類が所収されている。

- ① 磐梯山噴火ノ景況 大塩村外一ヶ村戸長役場文書
- ② 磐梯山破裂眺望図 小林榮「東洋学芸雑誌」明治25年4月号
磐梯山破裂の実況 小林榮 地学講習会の談話
※小林榮は猪苗代小学校における野口英世の師である。
- ③ 元朝院文書
- ④ 磐梯山噴火由来記 遠藤重吉編

このうち今まであまり全容が紹介されなかった元朝院文書から、磐梯山噴火の実況をみていきたい。

(1) 元朝院文書について

元朝院文書は、猪苗代町安穏寺の隣で修験を営んでいた元朝院（長沢重照）による記録である。元朝院文書は、噴火に遭遇した自らの見聞と伝聞を7月下旬にまとめたものと考えられる。

元朝院は、1870（明治3）年に生まれ、1950（昭和25）年81歳で没している。31歳で結婚し長沢氏に養子に入った。その後長沢家の改築に際し、同じく猪苗代町内野の修験である金剛院（榊原氏）が史料類を受け継ぎ現在に至っている。

序文には、磐梯山噴火に遭遇した元朝院が、河や山の変遷、被害の地形、被災者の惨状を図写し、噴火の兆候の有無、破裂の様子を探ろうとして、泥土がまだ濡かない現地に赴いたことが語られている。再訪時には大磐梯山に登り、噴火口まで到達してその様子を図写している。「石川氏」という人物から稿の催促を受け、伝聞事項も入れたものがこの内容である。

榊原氏の話によると、元朝院は養子に入る前には巡査であったという。『磐梯山噴火百周年記念誌』によれば、噴火に際し県内各署から巡査43名が現地に出張している。かつて巡査であった元朝院が、これら派遣された巡査のなかに知り合いがあり、調査に同行した可能性も十分に考えられる。元朝院にこの報告をまとめることをすすめた石川氏もこうしたかつての職務における人的つながりであった可能性が高い。

(2) 目次と内容

元朝院文書の構成は、序文、1 磐梯山其近傍の地理、2 噴火の惨状、3 被害の境域、4 被害者の惨話、5 長瀬川の填塞、6 噴火口、7 噴火の兆候、8 磐梯山の歴史、9 救助及び保護からなる。

内容は、自らの心情を述べた部分、被害の実態に関する叙述で構成される。被害状況については、自分自身の見聞したことと、伝聞事項を分けて記載しており、引用の数値についても県庁文書との一致がみられ、かなり公的な報告書に近いものがある。

内容は長文に及ぶため必要事項についてまとめたものを以下に紹介する。見出しなどは適宜読みやすいように付した。

なお、集落名は原文のままとした。

(3) 元朝院文書の内容

序文

1 磐梯山其近傍の地理（略）

2 噴火の惨状

当日の様子

明治21年7月15日朝は晴天であった。

7時45分頃、地震が起こり、一層強い揺れとともに、鳴動が3回あった。2回目は1回目よりも烈しく、まるで百万の迅雷が地上に落ちたような響きとともに、火焰が噴出し、黒煙・水蒸気が天空に昇るのがみえた。この時、石塊が幾百となく飛びあがり、天地に白光の玉を付けた太い1本の煙柱を立てたようで、玉が散乱し、煙は四方へ拡がって灰砂の雨を降らした。

3回目の鳴響は小磐梯の破裂の時で、2、3間の巖石が落ちてきて、数百年の間山にあった大木が根から抜け、中ほどから折れて山麓に倒れ、崩壊した泥土は非常な勢いで押してきて、猛烈な疾風が起きて東南に吹き荒れ、約20町余は全く惨澹たる暗黒の世界になり、約10分してようやく天光が見えるようになった。

各所の実況

当地のみならず県下各地の様子を伝えており、時系列的な経過を知ることができる。

猪苗代町 磐梯山が噴火して黒煙が天にみなぎり、鳴動が甚だしく響いて、棚の上の膳・椀を落とす位になったので、取る物も取りあえず、そのまま逃げて駆けだし、中山峠を指して逃げて行く者もあった。若松に向かって逃げ去る者もいた。そのうち黒煙が渦を巻いて頭上に襲いかかり、砂礫が雨のようになり、まだ逃げない者はこのため気絶する者もいた。また一時駆け出したものの老父のことが気にかかり、取って返して老父を背負って走る者もあれば、動かない老母の両手を取って連れていく者もいたが、なかなか困難だった。黒雲は東北へ進んで猪苗代町は害を免れ、皆安心したという。

若松 地震とともに烈しい音がしたが、格別気にもかけないうち、東北磐梯のあたりが雷のように曇って煙が中空に立ち上るのを見て、初めて噴火であることを知ったという。

猪苗代湖上 戸の口からの蒸気船が山瀉に着いたとき、にわかに湖中に怒涛が起きた。早々上がった者は茶屋で飯を食べ始め、遅れた者はようやく茶碗を手にとったばかりのところに、たい

へんな激動がきて、既に会津へ行こうと思った者も恐れをなして引き返したという。

本宮駅 8時頃少し地震があった後恐ろしい物音が響いたので外に出ると、磐梯山の方角のあたりに青黒い雲が立ち上った。始めはその幅が3尺くらいだったが、漸くのびて何百間にもなった。9時過ぎに、この雲は駅の空をおおい、灰が霧のように降り、一時は往来の人も絶える位だった。11時によく降り止んで晴天となった。

三春地方 午前8時頃地震があり、轟然と鳴り渡る音がして、9時過ぎに灰がたくさん降り、一時は往来の人も絶えるくらいだった。11時頃ようやく晴れた。また同所には3貫匁位の大石が降ったともいう。

栖葉地方 磐梯山から14里隔てているが、午前11時頃、空雲が霧のように見えて、寒暖計は95度になり、12時頃に晴れたが、桑の葉や草葉の上に灰のような鼠色の細かい粉が降りかかり、地上も白くなったという。

信夫郡庭坂村 いつものように早朝から馬を引いて西山に登って草叢に放ち、草を刈っていたら、どこからともなくドーと鳴り渡ると同時に山中が動いたので、馬を置き捨て一同逃げ帰った。

福島町 鳴動を聞いた人がいて、信夫山ではたいへん響きを感じたという。

地震は所々によって大小あった。重量の重いものほど早く落ち、軽いものほど遠くに飛散した。当時風は西北で、降下の方角は東南である。初めは豆大のものがハラハラと降り、後に灰のような細末が降った。16日佐藤氏が出張の際、熱海・中山等の山々や草はことごとく白くなり雪のようであったという。

噴火後4、5日を経た様子

- ・泥土が大潮の勢いで2、3里押したため、凹凸をなしてその角が稜角になっていたが、大雨後灰水が流れて形跡を失った。
- ・木の葉の表裏が雨泥を帯び傷んで垂れ、桑樹が倒れて灰を蒙ったが、雨後は見る事がなかった。
- ・灰が飛散したものが一大石面に厚さ2、3寸かかり、その石が斜めに傾いた方に泥水が滴り、地上に達したのものもある。達しないものは充分水気を含んでいたが、雨後全くその形跡を失った。

3 被害の境域

災害の及んだ地方は山の西北より東南に至る間で、降灰や堰水のため間接に被害を受けた地域は10里を出るが、直接に害を受けた所は、南北5里・東西3里である。

被害の実況

災害は、崩潰泥土・風及び木石・灰砂である。

崩潰泥土 3か所で激烈であった

① 峯なく谷が多い松原村に向かったもの。1里を隔てた市ヶ峯の山頂を打ち毀して乗り越え、すぐに取上山に打ち当たって大木を倒し、大石を飛ばしたが打ち毀すには至らずに止まった。ま

た市ヶ峯に当たった反動の勢いで、更に南東の長坂まで斜めに下ったものも甚だ烈しかった。泥土は凡そ2里四方、深さ10余丈に及んで、転々と小山ができた。

② 赤埴と櫛ヶ峯との間の枇杷沢から押し出したもの。見祢村地方を埋め、七尋石と称した最大の巖石を抱いて、10余町の外に転落させた。

③ 川上温泉の上のグミ沢。速度が非常に早く、長坂は鳴動に驚き直ちに飛び出したが、わずかに2、3町をでたところで埋死したものが多い。たしかに長坂は市ヶ峯に衝突した反動の泥土に埋められたもので、その間7、8分時間があったのをみれば、泥土は流出や溪谷を伝わったものではなく、一旦崩潰の勢いですぐに四方に散り落ちたものである。

風及び木石

突如として東南に吹き荒れたのは、空気が真空になったためか、山勢によるものか不明である。

風力は非常に強く、東方の破損した家のなかには大石が落ちたものもあったが、大抵は風害による。被害者の衣服は切れて片々となり、また裸体のものが多いのは風のために、吹き破られ、吹きとられた者である。

灰は軽浮なので、風に従って東南部に多く、積もった所は浅くは1寸から、深くは7、8寸から1尺に近い。被害者をみれば、大抵面部が脹れて焦げ、灰が皮膚に付着して取れず、砂の樹石に粘り付いた状態から、火気と水分を共に含んでいたことは明らかである。

2、3間の石が所々に散乱する中に大石の跡があつて形のないものは、固有の石の振動作用で他へ転じたものと思う。噴火口近辺をみれば、山のような巖石が樹木を折り、砂礫を排して土中にはまりこんだ跡がある。前者も同じく天に飛び、空を突いて勢いを持って落下し、すぐに土中に没入したものだろう。これは白砲弾が土中に深く入った形跡と同じである。

このように泥土・大風・大石に襲われた数里の間は果てしなく無生物の悲境となり、手足のみ河中に浸されたり、胴中から切断されたりして、至る所酸鼻に堪えない。なかでも長坂はことに甚だしい。

長坂は櫛ヶ峯の麓にあり、28戸のうち潰れた家はわずか1戸だが、死亡98人、怪我36人、一家残らず埋死したものが5戸ある。川上温泉場は全3戸が数丈の下に埋まり小山のような凸起ができ、ただ屋頭の葦草がわずかに現われているのみで、居住の者・浴客共に50人ほど死亡したという。

上ノ湯、中ノ湯、下ノ湯3か所のうち、下ノ湯は小磐梯の北の谷間にあつて、数十丈の下に埋められ、生存者はないはずで、同日湯にいたものは30名という。中ノ湯は谷を隔て下ノ湯より4町程上がった所で、戸数2戸あり、上ノ湯はそれより東南方2町程隔てて大磐梯の北半腹にあるが、中ノ湯では助かった者もあつたようで、死亡は凡そ10余名という。

桧原村は、細野・雄子沢は全て埋没して一人も助かったものはない。秋元原は50年ほど前に山内小角が開墾した土地で、12戸が全て埋没した。当時幸いに他へ出かけていた者12人を除き、死亡は60余名という。この3か所は2里を隔てた遠い地域であるが、人畜埋没の被害は大きかった。もしその間に人家があつたら被害は更に大きかつただろう。

被害の総数に異同があるが、7月20日の調査に係わるものというので、概要を記す。

被害の概要

被害の村落 桧原村のうち雄子沢・細野・小野川・秋元原

磐瀬村のうち見祢・渋谷・長坂

若宮村のうち名家

蚕養村のうち小田・白木城

三郷村のうち伯父ヶ倉

被害戸数 463戸のうち潰家47・埋没45・半壊8戸

被害地人口 2,891人

死傷者約518人うち死亡477(うち浴客33)

負傷者47人(うち死亡1、自宅治療28)

治療所にて治療中18人(重症6、軽症12)

他に縁故ない者12人

救恤所で手当てする者10人

死骸発見 81人うち親族引渡49人、仮埋葬32人

斃牛馬 57頭うち斃牛3頭、斃馬43頭、負傷馬11頭

被害総反別 約1万1,032町2反17歩(埋没して原形を失ったもの)

田23町7反2畝17歩

畑124町4反6畝27歩

宅地10町1反6畝17歩

山野3,018町2反25歩

墓地1反7畝21歩

温泉敷地3歩

官有地反別 約7,543町6反5畝27歩

官有林 約300町

民有林反別 約15町8反歩

用水欠乏反別 約989町4反8畝21歩

4 被害者惨話

噴火時の悲惨な話や奇跡的に助かった話の伝聞が記されている。

○ある婦人が嬰兒を背負って逃げ去るうち、背に焼石が飛んできて嬰兒の頭にあたり、児は直ぐに碎かれて、血が母の全体を浸したが、母は気づかずそのまま若松へ逃げていった。

○猪苗代町の岡部という呉服店は、市中でかなりの財産家であるが、子供が病気なので、母親と子供3人に番頭共総勢7人で川上温泉場に行き、ようやく到着した頃被害に遭って埋没し、母親ひとりが17日に発見された。

- 熱海村には随分遭難者が逃げてきて、我が子や親はどうしたかと泣くようすは目も当てられなかった。また暴風雨が静まった後、被害地の人民は心を失ったありさまで、ただ人をみれば「助けてくれ」と泣き叫んで、その惨状は見るに忍びなかった。
- 北会津郡八幡村滝沢峠の立場茶屋遠藤方では、当日猪苗代地方から逃げてきた者は、老若男女約 130 名で、その日の 12 時頃着いた。いずれも足ははだしあるいは裸体で、たいてい朝食を食べずに来た上、長い道を滝沢峠から逃げてきたので疲労していたため、早速炊き出しをして食物を与えた。
- 年の頃 24、5 で妊娠 7 か月位の婦人は、山の西北で土石に埋まったが、幸いにも両方に林あるところに挟まったので、その間から空気が流通してわずかに呼吸ができた。翌 16 日死体捜索の人がかすかな声で地中から叫ぶ者があると早速掘り出し、命に別状はなかった。
- 秋元原の 18、9 才の娘はその朝猪苗代町へ馬をひいて炭を売りに出かけたため、20 人の家内でただひとり助かった。
- 長坂では 79 才の老婆が逃げられず、ようやく転び出て一本の木にしがみついていたため助かったが、嵐が静まったのち、あまり一生懸命にとりついたのでなかなか手がとれなかった。
- 横浜のある商人が磐梯の湯に浴客でいたが、当日早朝から帰路につき、約 2 里も行った所で噴火にあったために難をまぬがれた。
- 名家の一ノ瀬伝吉の娘 26、7 才は、朝早く畑仕事にでかけたが、噴火の大音響に驚き逃げ帰ろうとする後方から泥土が押し来たが、運強く泥土の上に乗せられて 20 町程下の方で止まった。妊娠 7 か月くらいであったが、泥土に押されたとき泥石で身体がもまれたため、子は助からなかったが、親の命は別条がなかった。

5 長瀬川の填塞

今回の噴火で間接的に被害を受けたのは長瀬川の填塞である。

長瀬川は長坂から細野の間約 2 里余が、ことごとく泥水のために塞がれ、源流は濁って桧原の原野に停滞し、流れが絶たれた。川東・河西数百町の田畑は幾日もたたずに乾燥し、稲苗は全て枯れ、今年の収穫は望みがないかもしれない。

猪苗代湖が早魃でも涸れないのは、長瀬川の長流が注ぐからである。今湖の水量を三分と仮定すれば、一分は湖本来のもの、一分は諸川の小流、残る一分は長瀬川の流れによる。

私の聞るところでは、長瀬川の閉塞により猪苗代湖の水位が急に 5、6 寸減ったという。もしこの勢いが長く続けば、湖の水位はますます減って田圃の灌漑もできず、魚の収穫も減り、湖水の美しい風景も、船の航行もできなくなる。

西は耶麻・会津・河沼・大沼等諸郡十有方里の田地から、東は安達・安積・岩瀬諸郡が数十万円の資本と数年の勤労を投げ打ってようやく開拓した開盛山数万石の新開墾も猪苗代湖によれば、再び原野になるだろう。

猪苗代湖は農家には天然の源泉で、百川の流れはここに集まって田畑灌漑の利を与えている。

この水が一旦その量を減少すれば、害の及ぶ所は少なくないだろう。今回の視察では念入りに新沼、新山のできた有様を詳らかにし、磐梯山からみた地勢を観察すると、その被害が甚大である事がわかるだろう。

長瀬川が閉塞して上流の水が停滞したため、2里四方に数十の湖沼が生じた。この水がすぐに決壊して下流の人家、田畑を押し流す恐れがあるなどの説が人心を不安にしている。しかし、私はこの心配はないものと思う。

また、小湖水が合わさって一大湖となれば、大塩地方に向かって流れ、新橋川の下流の阿賀川に注ぐだろう。これだとあふれる心配はない。しかし、大塩川に出る細野のドンボという所は、約8丈の丘陵に居住しているので、水勢が急でも決して崩れはしない。

調査によれば、既に小野川・大島川等諸川の上流は、瀬という瀬が停滞し、現に小野川は人家が浸水して他に移転した。また桧原本村から18町ほどの所にも200余間四方、深さ1丈5尺の水溜が生じた。こうした水溜は転々と至る所にできて、その数が既に数十に及んでいる。しかし、これらが溢れてひとつの大湖となるのは少なくとも半年は要す。しかし、水が満杯となれば、自ずと低いところに走って、流れ出すのは明らかである。決して一時に膨張して決壊し、田畑や人畜を埋める心配はない。私も同じ意見であり、地勢の高下にしたがって、ゆっくりと水を低いところに流せば、力を用いることが少なくて効をなすだろう。

もし地勢を調べず、水路を計らず、みだりに動きを元の姿に復そうとすれば、功をみることもなく、諸所の水が溢れ出して停止することはないだろう。私は担当が確実に効果をあげる事を希望する。

6 噴火口

小磐梯は大磐梯山と山礎がひとつで大磐梯の上に立っているような状況で高さが40丈余あったが、今は全体が崩潰して、南北約20町余、東西約15町余の山跡を残すのみとなった。

大磐梯の西方の大寺より噴火口まで約2里余、山麓原野を経て次第に登るに随い険しくなり、谷川沿いにいけば切り立ち、山道が険しくて進むことのできないところが多い。

中ノ湯は、浴場が泥に埋まり、池沼のなかから沸騰するところがある。傍らの客亭茅屋は山が飛び落ちたような高まりとなっている。

切り立った岩の間から見ようとしても水蒸気がほとぼしり、壘石が崩壊して誠に恐ろしく、危険な状況は、険しい山に登り死地に入る覚悟がいる。私も足元を確認しながら、ようやく噴火口の北2町まで進むことができた。

噴火口は山跡の中央より少し南にあり、西南から東北に長い楕円状で、長さ3町余、巾2町余。水蒸気はまるで群雲が岩穴から噴き出すように湧き出し高さ100丈にも達するように思われた。噴出の場所は8、9か所もあるようだが実は3か所に過ぎない。遠く離れて望遠鏡で覗いても穴の中の状態を知ることはできない。噴口の泥土は青色で硫黄を含んでいるようである。噴火口の外にも湯気が少々立ちのぼるところが数か所あり、轟々と沸騰する音はなかなか寥しいようすである。

坑中は四面が皆岩石の破裂した塊となり、層をなして堆積し、普通の山石とは全く異なっている。殊に北方の底の方に崩れたものが多く、南方は大磐梯の岩石なので塊石が当たって散乱し、転々と谷間に落ちて谷が削られて凸形の丘陵に変わり、実に筆力に形容しがたい。塊石がうずたかい所は雨後殊に崩れ易く、私が見ていた時にも、西南の堆石が数十丈崩れ坑中に転落し、その響きがしばらくして止まず、又噴口の東に当たって数十丈の響きが起こったのを見た。

峯の噴口に面する所は直に塊片は受けなかったが、樹木が割れて大抵焦げただれていた。又小磐梯が破裂した南端と北端との岩石が残って山容が想像できた。

上ノ湯があったところは形跡を失い、湯気が立ち登り巖が崩れて登る事ができない。中ノ湯の跡には、2間に4間四方位の家屋の屋根は萱葺きで7分ほど残り、柱は太く北に傾いていた。何となく臭気があり、足下に数十人の不明の同胞がいるかと思うと悲しみと畏れが共に起き、ぞつとした。私より2日前に来た人の話によれば、右の柱の傍らに僧侶の衣のようなものが見えたという。

山勢を見ると南は大磐梯が目前に屹立し、北は溪谷が斜めに低下し、北方に傾いていることから、当時土石が北方に走り衝突する猛威をほしいままにしたのは当然のことと言える。

望遠鏡で北方を望めば、長瀬川が埋まって新たに湖沼となったものが50か所もあり広い砂漠の間によく数点の緑を認め、ちょっと心が慰められるものがあった。

7 噴火の徴候

磐梯山近傍

10年以前より噴火の噂があった。7月下旬より時々磐梯山が鳴号し、次第に増していくにつれ、松原村各集落の人民は必ず地変があると語り合った。

地震

7月8、9、10日の午前11時頃、13日の午後3時頃にあった。

山鳴り

14日午前8時頃より鳴動が強くなり、磐梯湯の浴客は逃げ帰った者も多数あった。

上の湯

4・5年前温泉路が急に塞がり近村の者は一時大いに恐れたが、後再び湧き出た。地中にごうごうという音を聞き、噴火の少し前に帰った者がいた。上の湯の少し高い岩の間から時々火が噴出す所があり、耳を傾けるとふつふつとして鍛冶屋のフィゴに似て、鍛冶屋地獄とか団子屋地獄とよんだ。

壺下村の土屋幸次郎の話

旧暦4月15日頃、川に殺生に行ったとき、夜の10時頃南方磐梯山の頂上より火炎が急に天を走り、1、2分の間を経て大砲のように響いたことがあり、同業者は皆驚いて家に帰った。光の色は青だった。福島でも、5月15日夜9時過ぎに大砲のように響き驚いた。ただし旧暦4月15日は新暦5月15日なので、あるいは同一のことかもしれない。

土田村の鈴木金右エ門の話

7月の始め黒澤尻へ「クルミの木」を取りに行ったとき、大木の折れるような響きをしきりに聞いた。

小田村

噴火の朝午前6時過ぎ、ある家の者が井戸の水を汲もうとして手桶を提げ、汲み上げたところ湯に変わっていて、大変驚いて逃げ帰った。午後5時過ぎまで村の井戸は湯気を帯びていたという。

8 磐梯山の歴史（略）

9 救助及び保護

今回の変事は早くも皇居に届き、天皇には痛く心を悩まされ、去る17日思し召しをもって罹災者へ金3,000円を下賜され、実地視察として侍従子爵東園基愛氏を差遣わした。また皇后も25日金1,000円を下賜された。

磐梯山が噴火して猛火がようやく消えても、人々はただただ恐れ世間は慌てふためき、土地を離れ、あるいは離散して救助を求める者千人余に及び、地獄の叫び声や血肉のしたたるさまが道端に散乱し、まるで百年戦争の地を踏んだ想いである。

当地の警察署と戸長役場では、人心の鎮静、被害者救助と死体捜索等に、夜昼なく尽力した。本県からは実況視察として警察本部保安課長高須氏が夜直ぐに出張し、続いて本県属庶務課新田氏、議事課西氏、土木課大江・後藤氏、農商課原田氏などが急いで途についた。一方折田県知事は西白川へ出張中だったが、これを聞くと直ちに土木課長佐々木氏、文書課松田氏と現地に行き、また岩下警部長も共に出張した。

警部長は去18日に、北会津・河沼・安達・安積・西白河・田村・岩瀬の7警察署から警部補4名、巡査4名を非常招集して、それぞれの手順を定めた。

折田県知事は18、19両日で岩下警部長、西・松田氏と共に現場に行き、佐々木土木課長・大江・後藤氏と桧原地方を視察し、部長・戸長を集め、長瀬川の填塞の所並びに被害者救助の方法などについて逐次協議をしたという。

主務省でも噴火についてその対策を協議したという。県知事は時々電報で実情を内務大臣へ報告し、永峰本県書記官は現地視察の後の22日に上京して内務省に報告したという。

内務二等技師古市公威氏は長瀬川填塞実測で出張し、その他地質局長兼理科大学教授和田維四郎氏、五等技師和田雄治氏、理科大学教授関谷清景氏・菊池安氏等が実況視察でそれぞれ出張した。

居所なく食物のない者は各々仮居宅を与え、食物を支給すれば、被災民も安堵し、餓死者が出ることはなかった。当初猪苗代戸長役場では3日間で20俵を炊き出した。

負傷者も随分多く、当時場所を選ぶ余裕はなく、猪苗代小学校・警察署分署撃剣場内の2か所を施治・療養の場とした。患者数は一時40名だったが、治ったり死んだりして24日には15名に

減ったので、日新館を借り受けて一括して治療を行った。負傷者は相創傷と火傷が多い。私が見たときは若い婦人が頭部の傷で脳漿が出ていた。

治療に従事する医員は、福島病院副院長北村徐雲氏・同院医星清記氏・耶麻郡医桜井於兎吉氏、猪苗代開業医六角謙三氏外2名、日本赤十字社から土肥淳朴氏・小山善氏・大森英太郎の3氏が負傷者救護として特に来診した。また大学院生芳賀英太郎・三輪徳寛氏が施術に従事し、世話が充分行き届いていて、わずかでも心残りのことはない。

神教・耶蘇教・真宗・天台宗なども救助の方法を調べ、法会を催し、米穀を支給し、義援金を募集するなどの動きがあり、上は公卿貴紳、海外紳士から民間の市民、宮中の婦人まで、あわれ痛ましい思いがやみがたく、先を争って救済の資金を出す者が日々紙上に加わり、その数、数千人、基金3万円に上った。

私が望むのは生存者のその後をよくすることだが、1,500人の前途はどうすべきか今研究すべき問題である。被害者の土地は耕作や居住に適さないため、北海道へ移転するか、安積近傍の開拓に従事するかは、資金を利用して生存者の善後策を講じる事は、ひとりひとりの理事者の計画如何にかかっている。

以上が元朝院文書の概要である。記載された数値などを県庁文書などの他の資料と比較することにより、これが書かれた時点での被害の実情が明らかになろう。

いずれにしても被災者自らの体験が記されたものは少なく、今後こうした資料の分析と検証が課題である。

5 資料にみる教訓

当時の被害が記された数少ない資料を丹念に読み込んでみると、限られた情報とはいえ、噴火の予兆や噴火後の変化が随所に散見でき、当時を復原する手段がもはや失われている今日にとって、貴重な情報が提供されていることが判明する。

今回解説した「磐梯山爆発罹災者に対する聴取書」や元朝院文書には、磐梯山噴火に遭遇した人々の驚愕と不安とともに、各地点における被害の実態が詳細に述べられている。私たちは改めて当時の視点に立って、被害の実態を再考することができるだろう。

今まで火山学などの自然科学の分野と文献史学の分野である資料から得られる知見の情報交換の場は極めて少なかった。今回の協業を契機に、同じ視点に立って、検証を進めていくことにより、新しい発見や今後の教訓となる可能性を探ることは十分に可能であろう。

なお、福島県歴史資料館には、噴火以前の該当地区の耕地集落や耕地が字別に描かれた地籍図が残されている。噴火で失われた景観と災害時の様子を地籍図をもとに、その地区でどの部分が被害にあったかを復原することも今後の課題として可能である（資料3）。

コラム さまざまな説がある磐梯山噴火の死亡者数について

コラム表-1 磐梯山の噴火における死亡者数の変化

月 日	官報・福島県・新聞社	人 数	出 典・備 考
7月17日	福島:乾1第510号 噴火被害状況上申	462	福島県庁文書 F1503 第19号
7月17日	新聞:朝日・読売・日日	凡そ400	
7月18日	官報:1515号	凡そ400	福島県から内務大臣への電報
7月19日	官報:1516号	凡そ500	福島県から内務大臣への電報
7月19日	新聞:読売	470余	福島県から内務大臣への電報
7月20日	福島:磐梯山噴火被害調	477	福島県庁文書 F1503 第21号
7月21日	官報:1518号	476	和田雄治技師から内務省への電報
7月21日	新聞:朝日	476	和田雄治技師から内務省への電報
7月21日	新聞:日日	476	和田雄治技師から内務省への電報
7月24日	官報:1520号	461	福島県から内務大臣への電報
7月24日	新聞:読売	477	磐梯山噴火被害調(F1503 第21号)
7月26日	新聞:日日	477	磐梯山噴火被害調(F1503 第21号)
7月31日	官報:1525号	477	福島県から内務大臣への電報
7月31日	新聞:朝日	477	磐梯山噴火被害調(F1503 第21号)

福島県庁文書や官報などの公的な文章と新聞記録から 1888 (明治 21) 年の磐梯山の噴火における死亡者数について調査した。

現在、公式の死亡者数は、理科年表に記載されている 461 人であるが、この数字は噴火直後に福島県から国に報告された数で、7月24日の官報にも記載された。磐梯山の噴火を調査研究した関谷らも同じ数字を使っている(「磐梯山破裂ノ話」：東洋学芸雑誌第86号)。

この官報の基資料は、福島県から内務大臣に出された「行方不明ナリシ 472 人ノ内檜原村字秋元原ノ者 11 名ハ噴火ノ際他行シタルユヘ異條ナシ」である。つまり、472 人の中の 11 名は別な場所にて助かり、461 人が行方不明ということである。

7月20日付で、「磐梯山噴火事変取扱に関する書類」の中に『磐梯山噴火被害調』(F1503 第21号)という 150 ページ余りの報告書がある。この中には町村別で戸籍単位の一覧表があり、死亡者を個人名で記載している。これによると死亡者数は 477 人となっている。磐梯山の噴火に関する報告書の中で、これが一番詳しい被害についての報告で、この 477 人を正確な数字として考えることが妥当ではないだろうか。官報でも 7月31日の第 1525 号では、477 人と報告している。新聞社の死亡者数の変化で見ても、7月24日以降は 477 人となっている。これは、『磐梯山噴火被害調』に基づいたものである。

その後、噴火 10 年の 1898 (明治 31) 年 7月31日に「岩代国耶麻郡・磐梯山爆発景況要録」という調査報告が出され、この中でも 477 人と記載された。噴火から 100 年の 1988 (昭和 63) 年に地元 3 町村(猪苗代町・磐梯町・北塩原村)で再度調査した結果、477 人が妥当ということになり、それ以降、地元ではこの数字を使っている。

今回の調査では、465 人まで名前と住所が判明したが、川上温泉での温泉利用客などに不明な部分があり、これらの人数を加算すると 477 人という数字が妥当と思われる。

コラム 磐梯山周辺の地名

磐梯山周辺の地名は読みにくいものが多い。上流と下流に分けて位置と読み方を示す。

[上流] 檜原湖 ひばらこ 小野川湖 おのがわこ

吾妻湖 あずまこ → 秋元湖に名称が変更されています あきもとこ

秋元 あきもと 川上 かわかみ 中ノ湯 なかのゆ 長坂 ながさか

蛇平 へびだいら

[下流] 櫛ヶ峰 くしがみね 名家 みょうけ 三ツ屋 みつや 磐梯山 ぼんだいさん

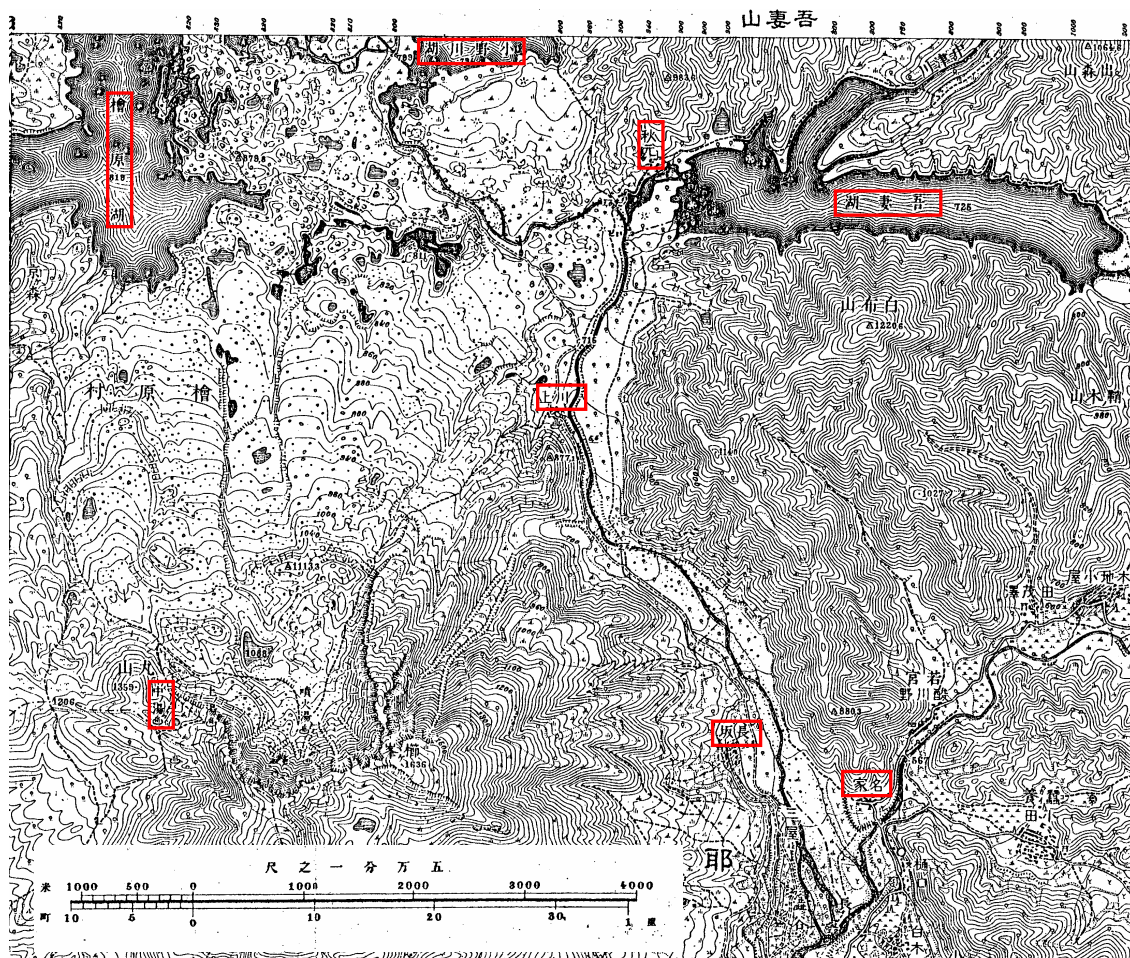
樋ノ口 ひのくち 渋谷 しぶたに 白木城 しらきじょう 赤埴山 あかはにやま

伯父倉 おじがくら 見祢 みね 沼ノ倉 ぬまのくら 堀切 ほりきり

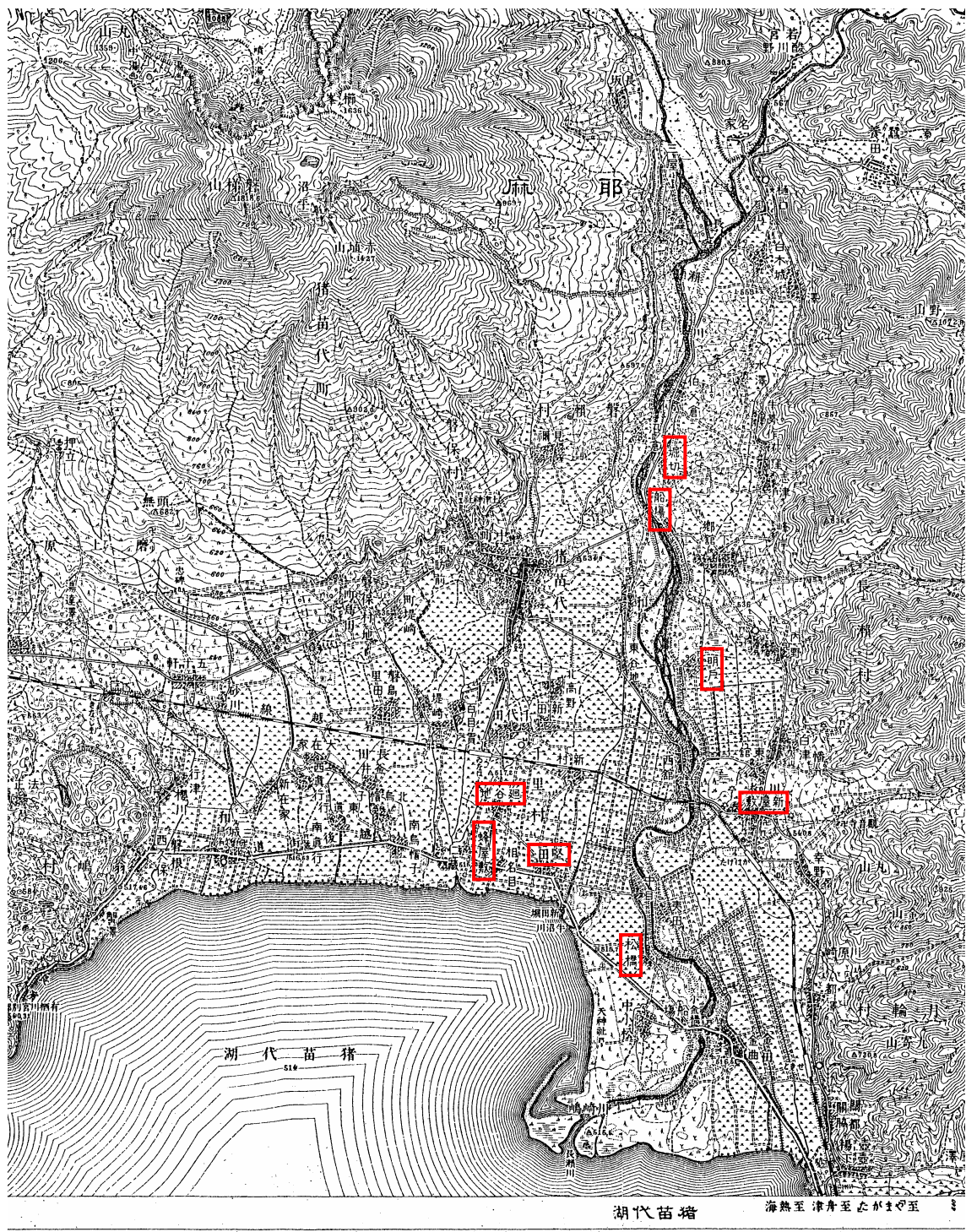
東谷地 ひがしやじ 東館 ひがしだて 西館 にしだて 新屋敷 あらやしき

廻谷地 めぐりやじ 堅田 かただ 蜂屋敷 はちやしき 中目 なかのめ

夷田 えびすだ 松橋 まつはし 中小松 なかこまつ 金田 かねだ



コラム図-1 上流の地区名 (大日本帝国陸地測量部作成地図に加筆)



コラム図-2 下流の地区名 (大日本帝国陸地測量部作成地図に加筆)